皇學館大学研究開発推進センター紀要　第七号
令和三年三月一日発行（抜刷）

講演

『日本書紀』を語る――『日本書紀』撰上千三百年記念に寄せて――

史料編纂所

講演

『日本書紀』を語る――『日本書紀』撰上千三百年記念に寄せて――

史料編纂所

前口上

『日本書紀』は、わが国初の勅撰歴史書で、その後『日本三代実録』まで継続して編纂された六国史の第一です。その完成・奏上については、『続日本紀』養老四年（七二〇）五月二十一日条に「是より先、一品舎人親王、勅を奉けたまはりて日本紀を修む。是に至りて功成りて奏上ぐ。紀卅巻・系図一巻なり」とあり、今年は撰上から数えてちょうど千三百年の記念の年にあたります。

皇學館大学研究開発推進センターでは、この記念の年を迎えるにあたって、神道博物館において熱田本『日本書紀』などの、『日本書紀』の古写本や注釈書を展示する企劃展を実施すべく、開催に向けた準備を進めておりました。また、それと並行して、史料編纂所と神道博物館が共催する形で連続の公開講座を計畫し、学外でも各種のエクステンション講座を開催すべく、講師の人選も終えていました。

しかし、ご承知のとおり、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受けて、すべての行事を中止または延期とせざるをえなくなりました。まことに痛恨の極みです。

ただ、史料編纂所では所員の荊木を中心に、すでに公開講座の準備を進めておりました。具体的には、従来の講演形式のものではなく、質疑応答のスタイルを採りつつ、司会者と講師が問答形式で進行するトークショーを立案しておりました。一般聴衆のかたがたがお聴きになりたいような話題を取り上げながら、全体として『日本書紀』の成立や内容について理解を深めることができるように項目を選定し、四月には荊木が原稿を作成しましたが、脱稿したところで、講座の中止が決定しました。

実際の開講は叶いませんでしたが、このまま原稿が埋もれてしまうのも惜しい気がしました。また、令和二年度に史料編纂所が予定していた事業計畫の一部を遂行した事実を記録に残しておきたいとも思いましたので、ここに、研究開発推進センター紀要の紙面を借りて掲載させていただくことにしました。われわれの微意をお汲み取りいただければ、幸いです。

なお、公開講座の性格上、細かな参考文献を注記することはしていませんが、話の根拠となる文献につきましては、荊木『『日本書紀』に学ぶ』（燃焼社、令和二年三月）を参照していただきたく存じます。

（荊木美行記）

第一回【日本書紀とはなにか】

◆今年撰上から千三百年の節目の年を迎えた『日本書紀』について、いろいろとおうかがいしたいのですが、本日は、まず『日本書紀』とはどのような書物かということを教えていただきたいと思います。荊木さんのご本を拝見していると、『日本書紀』はいろいろと謎の多い書物のようですね。本来の書名についても議論があるようですが。

『日本書紀』にはべつに「日本紀」という呼び名があります。それ自体は、この書物のことを記した史料に二様の表記があるので、疑う餘地はありません。

ただ、どちらが本来の書名であったのかは、はっきりしないところがあります。かつては、江戸時代の国学者伴信友のように、「日本紀」を本来の書名とする研究者が主流でした。しかし、現在では、「日本書紀」が本来の名前だと考える研究者が多数を占めています。

◆では、「日本書紀」という書名は、なにに由来するものでしょうか。

おそらく、「日本書紀」の「書」は、中国の紀伝体の歴史書である『漢書』『後漢書』の「書」と同じ意味だと考えられます。中国の南北朝時代の范曄という歴史家が『後漢書』を書いたとき、皇帝の動静を記した「本紀」の部分を「後漢書紀」と題していますが、「日本書紀」もこれに倣って「日本書」の「本紀」という意味で名付けられているのだと思います。

◆『日本書紀』は何巻あって、なにが書かれているのですか。

『日本書紀』は、神代のむかしから説き起こし、それに続けて初代の神武天皇から四十一代持統天皇までの歴史を編年体で記したものです。本文は全三十巻から成り、全文が現在も伝わっています。完成時には「系図一巻」というものが別にあったようですが、これは現存しません。また、「別巻」というものも附属していたようですが、これも今は残っていません。

◆いつ出来上がったものですか。そして、完成までの流れを教えてください。

『日本書紀』の編纂は、一般に、川嶋皇子以下十二名に、帝紀と旧辞を整理して確定せよと命じた天武天皇十年、西暦六八二年の詔に始まると云われています。しかし、いっぽうで、和銅七年、七一四年に紀清人と三宅藤麻呂に詔して国史を撰ばせたとする『続日本紀』の記事を『日本書紀』の編纂の開始とする考えもあります。これは、『日本書紀』の完成を急ぐための梃入れ人事ではないかと思うのですが、そうではないとするのがこの説です。

たしかに、天武天皇十年を起点とすると、完成までに三十九年もの歳月を要したことになります。しかし、作業の開始が和銅七年だとすると、完成までは約六年となり、それほど不自然な感じがしません。しかも、直前の和銅五年には『古事記』が完成していますから、同書に満足できなかった元明天皇が、新たな歴史書の編纂を思い立ったと考えると、両者の関係もうまく説明できます。

◆ただ、和銅七年説では説明できないことがありますね。

そうです。たとえば、『日本書紀』では、ある人物がはじめて登場するとき、「なんとか氏の祖先の誰それ」というふうに紹介しています。たとえば、崇神天皇の巻に「大水口の宿禰」というひとが出てきます。彼は、穂積の臣というウジの祖先だと記されているのですが、ここに用いられている「臣」は、カバネと呼ばれる称号の一つで、天武天皇十二年に八色の姓が制定される以前のものです。もし、和銅七年から編纂が始まったとすると、八色の姓を用いて「穂積の朝臣」と書いたはずです。にもかかわらず、「臣」が用いられているのは、『日本書紀』が、八色の姓が定められるより前の記録を材料としていることを示しています。ですから、『日本書紀』の編纂は天武天皇十年、六八二年に編纂が始まったとみるほうが合理的です。

◆『日本書紀』といえば、どうしても『古事記』のことが頭に浮かびますが、両

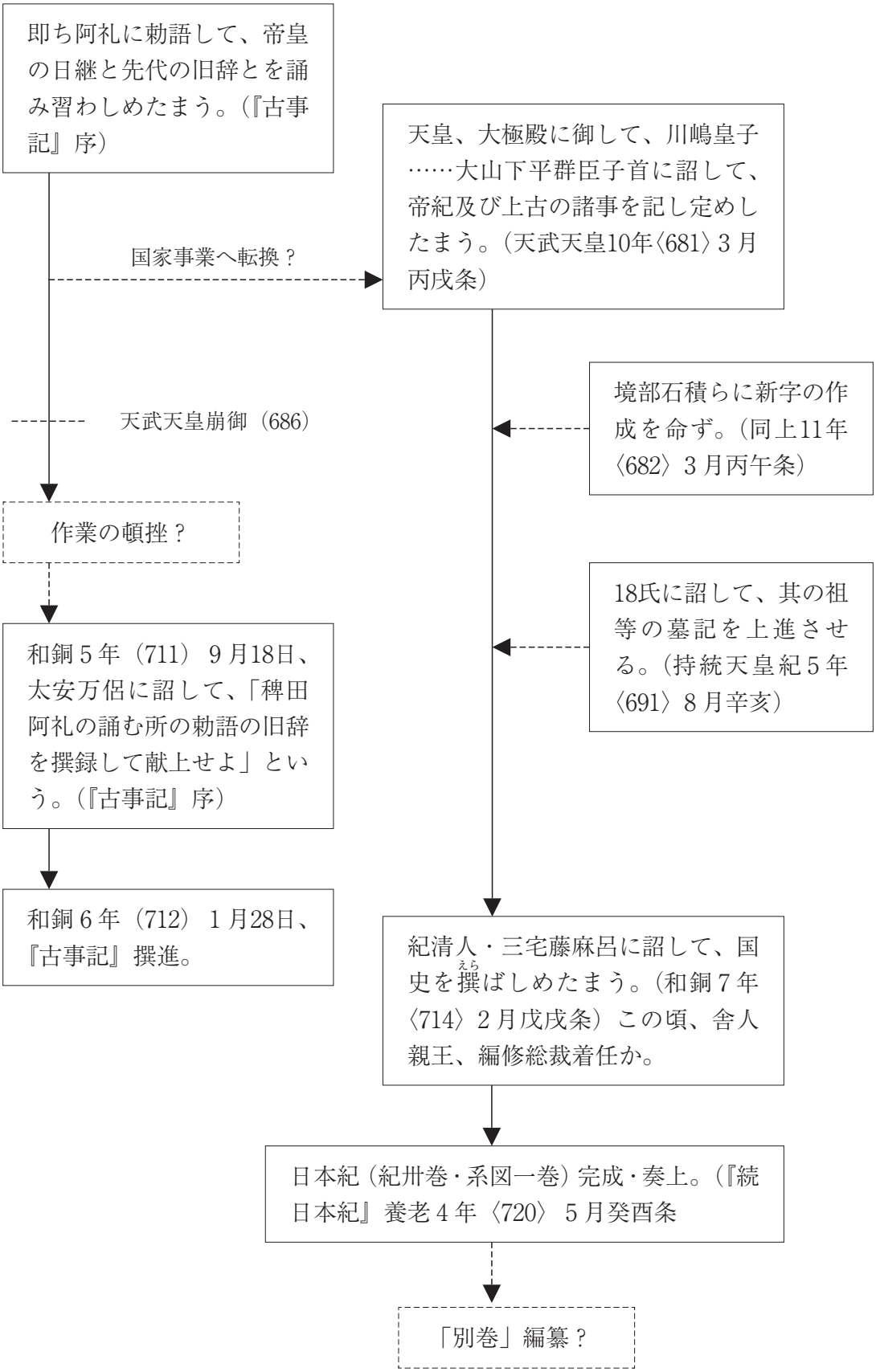

図１　『古事記』『日本書紀』の編纂過程（私案）

者の関係はどうなのでしょうか？

『古事記』には序文がついているので、完成に至るまでの経緯がだいたいわかります。これによると、天武天皇が稗田阿礼（ひえだのあれ）という舎人（とねり）を使って編纂を始めたものだといいます。天皇は、貴族の家にある帝紀と旧辞が真実と異なり、偽りがたくさんあることを憂えていました。帝紀とは、歴代天皇の記録であり、旧辞は宮中に伝わった神話や伝承のたぐいを指しますが、天武天皇は、それらの決定版を作り後世に伝えようとしたのです。

しかし、この作業は、天皇の存命中には完成しませんでした。そこで、天皇の愛息・草壁皇子の妃であった元明天皇が、あらためて太安萬侶（おおのやすまろ）に命じて、阿礼の読んだ旧辞をまとめさせたのが『古事記』です。序文には、和銅五年、七一二年の正月に至って天皇に献上されたとあります。

序文のとおりだとすると、『古事記』の編纂も天武天皇の発案であり、そこには帝紀・旧辞の正説を定めることが謳われていますから、『古事記』が『日本書紀』となんらかの関係を有（も）つことは、誰もが考えることです。ただ、序文には、『古事記』が天皇と阿礼が二人で始めた小規模な事業だったと書かれていますから、天武天皇十年にはじまったという大規模な修史事業とはちょっとイメージがちがいます。

これは一つの假説ですが、天武天皇は、『古事記』の編纂に手をつけることによって本格的な歴史書の必要性を痛感し、阿礼との作業とはべつに、あらたに大々的に帝紀と旧辞の整理を思い立ったのではないでしょうか。天武天皇朝に始まったという『古事記』『日本書紀』の関係についてはいろいろと説があるが、わたくしは、そう考えています。

◆『日本書紀』は、どんな材料を使っているのでしょうか。

『日本書紀』は豊富な文献をもとに出来上がっていますが、その主な材料は帝紀と旧辞です。この二つは、『日本書紀』の素材であると同時に、『古事記』の主要材料でもあります。

帝紀が、具体的にはどのようなことを記していたのかは、研究者によって多少とらえかたが異なりますが、歴代天皇の称号、宮の所在地、妃や皇子・皇女のこと、亡くなった年や山陵の所在地などではなかったかとみられています。このほかにも、治世における重要事項や、さらには、皇位継承に関する具体的な物語も載せられていたと考えられています。

いっぽうの旧辞は、神々や英雄の物語を記録したものです。帝紀はすべての天皇について記録が残っていたようですが、旧辞のほうは、そうではありません。たとえば、第二代（記紀の代数による）綏靖天皇から第九代の開化天皇までは、記紀ともに帝紀的な記載しかなく、旧辞的な物語は載せられていません。これらの天皇が「闕史八代」と呼ばれるのも、そのためです。

◆『日本書紀』は、帝紀と旧辞以外にどんな材料を利用していると考えられますか。

『日本書紀』が使った材料については、坂本太郎先生の詳細な研究があります。先生によれば、さきに紹介した①帝紀・②旧辞のほかにも、③貴族の家々に伝えられていた先祖の記録とか、④地方に伝えられた物語とか、⑤政府が保管していた記録、⑥個人の手記、⑦寺院の縁起、⑧百済に関する記録などが利用されたようです。第五回でお話する壬申の乱の記述では、「安斗宿禰智徳日記」（あとのすくねちとこ）のように、大海人皇子軍に従軍した舎人の手記が利用されています。

『日本書紀』が歴史書としてすぐれているところは、こうした豊富な文献をできるだけ忠実に引用し、叙述の公正、内容の充実につとめた点にあります。これらの資料は、「一本に云はく」「別本に云はく」などの形で引用される場合もありますが、「伊吉連博徳書」（いきのむらじはかとこ）「難波吉士男人書」（なにわのきしおひと）といった具合に、書名をあげている場合も少なくありません。

◆『日本書紀』は、誰が書いたのですか。

編纂に携わった人々は、よくわかっていません。確実なのは、最終段階におけ

る編輯総裁が舎人親王であったことと、和銅七年に紀清人と三宅藤麻呂がスタッフに加わったという二点だけです。

もっとも、天武天皇十年の詔が『日本書紀』に関するものだとすると、ここに名を連ねる川嶋・忍壁（刑部）二皇子と広瀬・竹田・桑田・三野の四王、それに中臣大嶋や平群子首といった貴族の代表者も編者であったことになります。

しかし、老齢や死亡を理由に途中でこの事業から離れたひともあったでしょう。完成までにはメンバーの交替も少なくなかったと思われます。坂本太郎先生は、大宝律令の編纂にかかわった藤原不比等・下毛野古麻呂・伊吉博徳・伊余部馬養のなかにも、『日本書紀』の編纂に関与したひとがいたのではないかとみておられます。また、加藤謙吉先生は、養老五年に紀清人とともに表彰された文章博士の山田三方・下毛野古麻呂・楽浪河内を『日本書紀』編者にあてるとともに、彼らの多くが藤原不比等と接点をもっていたことを指摘しておられます。

◆天武天皇十年当時の編輯委員に関しては、なにか興味深いお話があるようですが。

それは、安康天皇の巻にみえる大草香皇子事件ですね。

安康天皇紀によれば、安康天皇が、弟の大泊瀬皇子、のちの雄略天皇に大草香皇子の妹の幡梭皇女を娶らせようとして、根使主という人物を使者に立て、大草香皇子のもとに派遣したといいます。ところが、彼は、大草香皇子が妹の贈り物として献上したみごとな冠に目が眩み、「皇子は妹を差し出すことを拒否している」と讒言します。

これを信じた安康天皇は、激怒して大草香皇子を殺害してしまうのですが、この時、皇子に仕えていた難波吉師日香蚊の父子は、主人が罪なくして死んだことを悼み、皇子の遺骸の傍らで殉死をとげます。

◆これには、別の話が伝わっていると聞きますが。

そうです。平安時代のはじめにおこなわれた『日本書紀』の勉強会の記録が残っているのですが、ここに大草香皇子事件の異伝を記した「帝王紀」という文献が

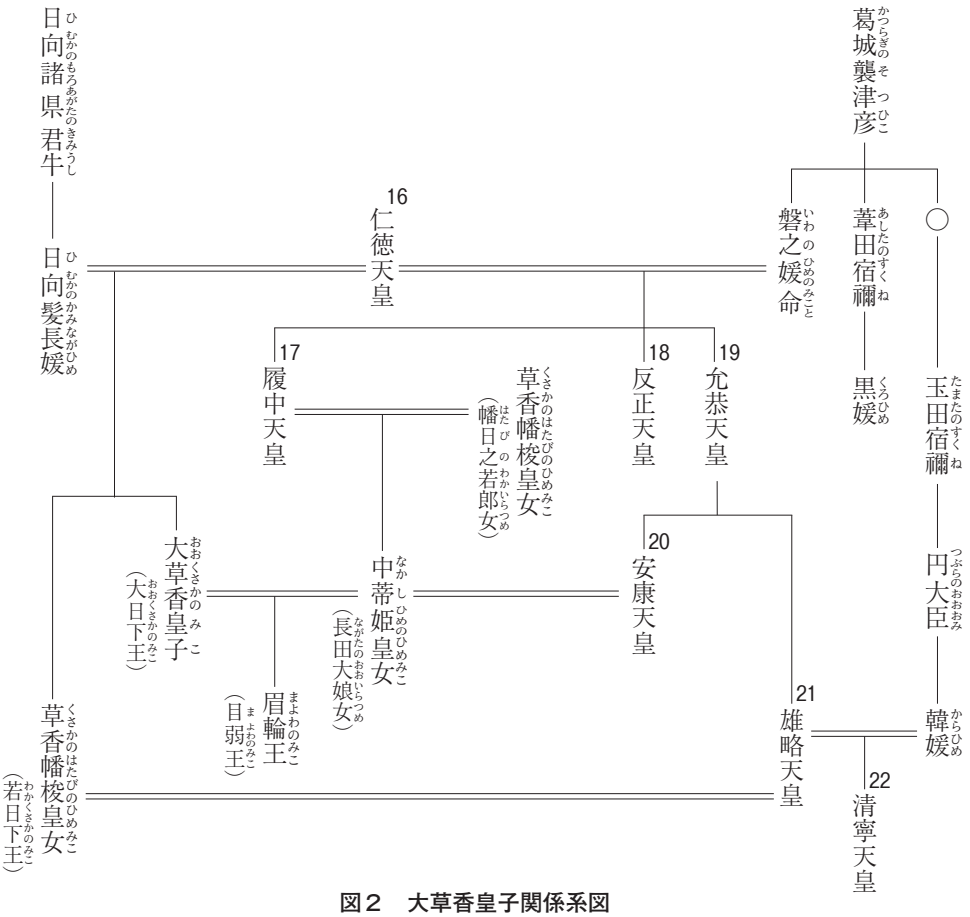

図２　大草香皇子関係系図

引用されています。これによると、日香蚊は主君の大草香皇子のあとを追って自殺したのではなく、安康天皇の軍勢に殺されたことになっています。しかも、そこには、『日本書紀』にみえる忠義な家来の面影は微塵もなく、安康天皇側の軍勢から「カマキリのように卑しい奴」と侮蔑される従者の姿があるだけです。

二つの史料に共通するのは、大草香皇子の家来に日香蚊という人物がいたこと、彼は首を切るという形で命を落としたという二点です。しかし、その人物評価に至っては、百八十度ちがうと云っても過言ではありません。どちらの描写が真実に近いのかはわかりませんが、『日本書紀』が日香蚊父子を忠臣とする伝承を採用したのは、天武天皇十年の帝紀・旧辞の整理・確定の事業のメンバーに日香蚊の子孫にあたる難波大形という人が加わっていたことと関係があると思います。

難波大形は、編輯会議の席上、自家の家記を持ち出して、日香蚊が主君に忠実な家来であったことを強く主張したのだと思います。この点からも、『日本書紀』の編纂は、彼が参加している天武天皇十年の段階からはじまったと考えるほうが合理的だと思います。

◆さきほど、『日本書紀』には「系図一巻」が存在したという話をうかがいましたが、これは、どんなものだと考えられますか。

さきにもふれましたが、『日本書紀』には、ほぼ全部が伝えられている本文とは別に、「系図一巻」というものが存在しました。この系図は現存しないので、不明な点が多いのですが、「帝王系図」と言い換えている文献もあるので、天皇を中心とする皇室系図だったようです。それもかなり詳しい系図だったらしく、必要に応じて四世、五世の孫に及び、さらには皇族から興った氏族の名も注記されていたようです。ほかにも、歴代天皇が政治をとった宮、亡くなった年、陵墓の所在地、治世のおもな出来事などが記されていた可能性があります。

散逸の理由ははっきりしませんが、十四世紀後半にまとめられた『本朝書籍目録』という図書目録では、『日本書紀』の本文三十巻を「帝紀」の部に、「帝王系図一巻」を「氏族」の部に、それぞれ分類しています。これをみると、本文三十巻と「系図一巻」ははやい段階から別々に扱われていたと考えられますから、あるいは、こうした認識が散逸の伏線となっているのかも知れません。「系図一巻」は、閲覧に便利な、図式化された系図の普及に押され、次第に存在価値を失い、姿を消したのではないかと思います。

◆「別巻」についても教えてください。

これも、「系図一巻」同様、現存しません。ただし、「系図一巻」のほうは完成を記した記事に名前が出てきますが、「別巻」のことはみえません。しかし、『日本書紀』を読んでいくと、本文三十巻と「系図一巻」のほかに、「別巻」というものがあったことがわかります。

雄略天皇の二十二年七月条には、有名な浦島太郎伝説が簡単に記されているのですが、そこに「詳しい内容は別巻にある」とみえています。これによれば、『日本書紀』には「別巻」が附属していて、そのなかに浦島太郎伝説の詳細が記されていたことになります。

◆では、この「別巻」にどのような性格のものだったのでしょうか。

わたくしも確たる根拠があっていうのではありませんが、この「別巻」こそは、『日本書紀』の編纂で出た餘材を類聚したものではなかったかと考えています。つまり、『日本書紀』が出来上がったあと、編纂に利用した材料や、割愛した原稿をあつめたものではないかと思うのです。

『日本書紀』を作るために、厖大な資料が集められたことは、いろいろな文献を引用していることからも想像できます。しかし、いっぽうで、日の目をみなかった材料や没原稿も、かなりの量にのぼったはずです。不採択の資料のなかには捨てがたい情報も多かったと思います。『日本書紀』の編者たちは、それを整理し、後日『日本書紀』を繙くひとびとのために役立てようとする作業、今風にいえばアーカイブに着手したことは、じゅうぶん考えられます。それが「別巻」ではな

かったかと思います。

◆これまでうかがった『日本書紀』編纂の経緯についてまとめると、どうなりますか。

『日本書紀』は、天武天皇がその編纂を思い立ったもので、その淵源を辿ると、天皇が稗田阿礼を使って始めた帝紀・旧辞の整理に行きつくと思います。完成までには作業の捗らない時期もあったようですが、元明天皇の時代に事業が再開され、舎人親王を編修総裁とする体制が整い、養老四年に至って完成したと考えてよいでしょう。元明天皇は、夫の草壁皇子のお父さんにあたる天武天皇の遺志を継いで、この事業を全うしようとしたのだと思います。

◆そうなると、『日本書紀』がなにを目指していたかをうかがうヒントは、『古事記』序文にあるのではありませんか。

そうです。そこで、あらためて『古事記』の序文をみますと、そこには、まちがった内容の帝紀と旧辞があることを心配した天武天皇が正しいものを作る作業を始めたとあります。ですから、『日本書紀』の編纂ももとを辿れば、帝紀と旧辞の正説を択ぶところにあったわけです。「帝紀と旧辞は、国家組織の根本となるものであり、天皇統治の礎である」という天皇のお言葉には、これらが国家の根幹をなす大切なものであるという認識がよくあらわれています。

◆ここにいう、もともとの帝紀や旧辞は、いつごろ、どのような目的で編まれたのでしょうか。

旧辞のほうはよくわかりませんが、『古事記』下巻の皇位継承の伝承が、欽明天皇即位の正統性を示したところで終わっていますから、帝紀の原形は、欽明天皇の時代に作られたと考えてよいと思います。欽明天皇は、異母兄弟にあたる安閑天皇・宣化天皇系の王統と対立していましたから、みずからの正統性を記録に残しておく必要があったのでしょう。

◆ただ、実際の『日本書紀』は、帝紀・旧辞以外にも、豊富な材料を駆使した、本格的な歴史書ですよね。これは、天武天皇の目指していたものといささかちがうように思いますが。

たしかに、帝紀と旧辞だけを使った『古事記』とくらべてみると、そのちがいがよくわかります。ですから、そうした疑問が出てくるのももっともです。

これは想像ですが、当初は帝紀と旧辞の決定版を目指していたのですが、編纂が長引くあいだに、編集方針の転換があったのではないでしょうか。そのため、『日本書紀』が最終的に目指したところはなんだったのかと問われれば、国のはじまりからの歴史を綴った、堂々たる国史を作ることにあったと答えるべきかと思います。

第二回【神話から歴史へ】

◆『日本書紀』の冒頭の巻第一と第二は神代の巻ですが、ここにはどんなことが書かれているのでしょうか。

巻頭の巻第一と二は、神代の巻に当てられています。これは、『古事記』が全三巻中、上巻を神代の叙述に費やしているのと同じです。

わたくしたちが「日本神話」と呼んでいるのは、こうした『古事記』『日本書紀』の冒頭部分です。『古事記』と『日本書紀』では、登場する神々や神話の展開に異なるところがありますが、天地のはじまりから説き起こし、伊弉諾尊・伊弉冉尊による国生み、天照大神の誕生、大己貴神（大国主命）の国譲りを経て、瓊瓊杵尊の降臨、神武天皇の生誕と展開される話の大筋は一致しています。

こうした『古事記』『日本書紀』の神話は、ストーリー性をもっているのが、大きな特色です。記紀の神話が「歴史神話」「古史神話」と呼ばれる理由も、そこにあります。しかも、天照大神をはじめとする神々は、系譜の上では神武天皇の祖先であり、その意味では、この物語は、天皇が日本を統治することの正統性

を語った、きわめて政治的色彩の濃い神話です。

◆『日本書紀』の神代の巻をみると、たくさんの異説があげられているので、びっくりしますが。

『古事記』『日本書紀』の神話の成立は古く、そのもととなる旧辞は、帝紀とともに六世紀にはまとめられていたのでしょうが、『日本書紀』が本文につづけて引用する「一書」のような異説が、数多く存在したとみられます。

そもそも、神話や伝承は、時間の経過とともに、次第に新しい要素が加わるのが普通です。また、語り手によって改変されていく性格のものですから、異なる複数の神話が存在するのは、むしろ当然です。『日本書紀』の編者が多くの異説を掲げているのは、古伝を尊重する、編者の公正な態度のあらわれだといえます。

こうした「一書」は、少ないところでも一二、多いところでは十以上も引用されていますが、これらは、もともと割注の形式で記されていたと考えられます。つまり、『日本書紀』が出来た当時は、二行に割って小さい字で書かれていたのです。現存する『日本書紀』の古い写本が「一書」を割注にしているのは、もとの体裁を伝えたものです。ただ、いつのころからか、本文と同じ大きさの字で一字下げにして写すことが普及したようで、卜部家本系といわれる『日本書紀』の写本はいずれもこの体裁をとっています。

なお、念のため申し上げておきますと、『日本書紀』本文、または正文といわれるものは、『日本書紀』編纂の際に、新たにまとめられたものです。たくさんある「一書」の一つをそのまま本文としたように考えられがちですが、じつはそうではありません。

◆では、巻第一の内容からうかがいたいと思いますが、書き出しは、天地のはじまりですね。

冒頭の記述を現代語訳しますと、こんな感じですね。

「昔、天と地はまだ分かれず、陰と陽の区別もなく、混沌として〔その様子は

まるで〕鶏の卵のようであり、ほの暗く、物のきざしはそのなかにふくまれていた。その明るく清んだものはたなびいて天となり、重く濁ったものが停滞して地となった。清らかで細かいものはむらがりやすく、重く濁った物は固まりにくい。だから、天がさきにできあがり、地は後に定まった。その後、そのなかから神が生まれた」

◆『古事記』にも同じことが書いてあるのでしょうか。

『古事記』『日本書紀』は、どちらも、天地の創成・神の出現から物語がはじまりますが、内容はすこしちがっています。『日本書紀』は、さきほど紹介したように、天地の開闢から説き起こしています。これに対し、『古事記』は、「天地がはじめて分かれたとき」と記すのみで、それ以上のことは語っていません。どのようにして天と地が出来たのか、高天原はどこなのか、といった点についてはなにも説明がないので、いささか唐突な感じがします。

もっとも、『日本書紀』のような、混沌の状態から天と地がわかれたという話は、中国の『淮南子』や『藝文類聚』という古典にみえており、陰陽論をもちいて天地の成り立ちを説明しようとしたものです。『日本書紀』にみえる天地出現の話は、こうした智識に学んだものでしょう。

◆いよいよ神々の誕生ですね。

はい。『日本書紀』は、最初に登場する神を国常立尊としていますが、『古事記』では天御中主神です。生まれた神の名や数は『古事記』と『日本書紀』のあいだで異なりますが、『日本書紀』では、国常立尊→国狭槌尊→豊斟渟尊という陽気のみによって生まれた男神のあと、男女の対偶神四代つづきますが（神世七代）、その最後に登場するのが、伊弉諾尊・伊弉冉尊です。

この二人が磤馭慮嶋で夫婦の契りをかわし、大八洲国を生み、さらに山や川を生みます。そして、天照大神・月夜見尊・蛭子・素戔嗚尊という四神を生みます。このなかで、天照大神は、光り輝いて美しく、国内を隈なく照らしたので、伊弉

諾尊・伊弉冉尊は喜んで、「われわれの子どもは多いけれど、このように霊妙な子どもはいない。ながくここに留めおくべきではない」といって、天上に送って、天上のまつりごとを授けます。

ついで、月夜見尊も、その美しい光は日神に次ぐものだったので、日とならんで治めるのがよかろうということで、やはり天上に送られます。これに対し、蛭児は三年が経過しても脚が立たなかったので放棄され、素戔嗚尊は乱暴なので、天下に君臨してはならないとして、根の国に追放されます。

◆追放された素戔嗚尊は、どうしたのでしょうか。

素戔嗚尊は、暇乞いのために高天原の天照大神を訪れるのですが、天照大神は素戔嗚尊を警戒します。邪悪な心のないことを証明するため、二人は誓約によって、神を生みます。

誓約とは、あらかじめ、これこれという兆候が出れば結果はこうだと決めておいて、神意をうかがうことをいいます。

判定の基準はいろいろありますが、この場面では、生まれる神の性別によって勝ち負けを決める方法が採られています。具体的には、素戔嗚尊から女神が生まれれば邪心あり、男神が生まれれば潔白という、事前の取り決めがなされています。そして、素戔嗚尊が天照大神の頭髪と腕に巻いていた玉を噛み砕いて五人の男神を生みます。最初の子どもに、正哉吾勝勝速日天忍穂耳尊という、「まさしくわたくしは勝った」という意味の名前がついていることからもおわかりのように、素戔嗚尊は勝利を確信します。しかし、天照大神は、玉はわたくしが身につけていたものだから、男神は自分の子だと主張して、結局、素戔嗚尊が敗れたことになります。

このあと、素戔嗚尊の行動は乱暴で手がつけられず、怒った天照大神が天石窟に籠る話は、よく知られています。そのため、国中が闇と化し、昼と夜の区別もつかなかったといいます。そこで、八十万神は智慧を絞って、ようやく天照大神を天石窟から引き出すことに成功しますが、乱暴を働いた素戔嗚尊は、罪を科せられ根国に追放されていきます。

◆このあと、素戔嗚尊が八岐大蛇を退治する話がありますね。

そうです。素戔嗚尊は根国に向かう途中、出雲で八岐大蛇を退治し（草薙剣の出現）、奇稲田姫と結ばれ、大己貴神――大国主命のことです――を生みます。

無事、奇稲田姫を救出し、出雲の清（須賀）というところに住まいを構えたとき、素戔嗚尊が詠んだ「八雲立つ　出雲八重垣　妻ごめに　八重垣作る　その八重垣を」という歌謡は、『古事記』にも出てくる有名な歌です。

八つの頭と尾をもつ八岐大蛇については、いくつもの支流にわかれて蛇行する出雲の斐伊川の姿をモチーフにしているという説が有力です。赤い眼や血がにじんだ腹は、上流域が鉄の産地で川の水が赤く濁ってみえるさまをイメージしているといいます。

ただ、斐伊川説以外にも、中国山地の山並みをモデルにしたものであるとか、『古事記』が八岐大蛇のことを「高志の八俣遠呂智」と書いているところから、越、すなわち北陸地方の豪族が出雲に攻めてくる様子をモチーフにしているとか、いろいろな解釈があります。

このあと、素戔嗚尊は根国に向かいます。『古事記』では、このあと素戔嗚尊の子孫である大国主命の活躍が詳しく記されていますが、『日本書紀』本文にはこの話は出てまいりません。

◆巻第一の内容をうかがいましたが、つづく巻第二では神話のクライマックスともいえる天孫降臨神話が登場しますね。いったい、どんなことが書かれているのでしょうか。

天照大神は、孫の瓊瓊杵尊を地上の支配者とするために、その地ならしとして神々を派遣して葦原中国を平定させようとします。

『日本書紀』では、天孫である瓊瓊杵尊を君主に立てることが、あらかじめ決まっ

ています。しかし、『古事記』では、さきに指名を受けていた天忍穂耳尊が、降臨の身支度をしているあいだに生まれた自分の息子を降臨させるよう、天照大神に進言します。

天孫降臨に先立って葦原中国を平定させるために、最初に派遣されたのは、天穂日命です。しかし、天穂日命は大己貴神に媚びて三年経っても復命しませんでした。

第二の使者に推されたのは、天稚彦命です。しかし、この神も復命しません。

こうして、二度の失敗のあと、第三の使者としてえらばれたのが、経津主神です。『日本書紀』本文では、みんなに推された経津主神に、みずから売り込んだ武甕槌神が加わるかたちです。

◆いよいよ国譲りですね。

そうです。『日本書紀』では、国譲りは順調に進んだと記されています。大己貴神もその子の事代主神もかんたんに降伏しています。まさしく「無血開城」といった印象です。

これに対し、『古事記』では、事代主神は国土の献上を承知しますが、大国主命のもう一人の息子建御名方神は、武甕槌神に力くらべを挑みます。その結果、建御名方神は敗れ、武甕槌神に信濃国の諏訪湖まで追い詰められて国譲りを誓います。

『古事記』では、このあと、武甕槌神がふたたび出雲に戻って、大国主命の本心をたしかめます。大国主命は、国譲りを受諾しますが、その条件として天つ神のような壮大な御殿を要求します。これが、出雲大社のご正殿だといわれています。このご正殿は、平安時代から日本一の高層建築として広く知られていましたが、発掘調査によって、かつては高さが四十八メートルもあったと推定されています。

さて、こうして準備が整ったところで、ようやく天孫の降臨です。瓊瓊杵尊が日向の高千穂の峰に天降りするという話は、まさに神話のクライマックスです。ただ、国譲りが出雲を舞台としながら、その後瓊瓊杵尊が天降ったのが日向というのは、いささか落ち着きません。これは、日本神話がいくつかのストーリーを繋ぎ合わせたからでしょうが、こうして、神話の舞台は出雲から日向へと移ります。

◆ここから「日向三代」と呼ばれる瓊瓊杵尊・彦火火出見尊・鸕鷀草葺不合尊の話がつづきますね。

瓊瓊杵尊は、吾田の長屋の笠狭の碕、いまの鹿児島県の加世田市附近まできて鹿葦津姫（木花開耶姫）と結婚し、彼女は懐妊します。しかし、瓊瓊杵尊は、鹿葦津姫が一夜で身籠ったことを信じようとしないので、彼女は、それを証明するために、産屋に火を放ちます。燃え盛る炎のなかから生まれたのが火闌降命や彦火火出見尊です。

この二人は海幸・山幸といったほうがわかりやすいかも知れません。

海幸・山幸の物語は有名ですから、繰り返す必要はないと思いますが、火闌降尊（兄・海幸）と彦火火出見尊（弟・山幸）は、あるとき釣り針と弓矢を交換しますが、彦火火出見尊は釣り針を紛失します。困った彦火火出見尊は塩土老翁という人物に相談し、この人の計らいで海神の宮殿に至り、そこでなくした釣り針を海神に捜索してもらいます。これがきっかけとなって、彦火火出見尊は、海神の娘の豊玉姫を娶り、海中の宮殿で暮らします。やがて故郷に戻った彦火火出見尊は、海神から授かった、潮の満ち引きを自在にあやつる二つの玉の威力で兄を服従させます。

◆神話の最後は、鸕鷀草葺不合尊の話ですね。

海神の宮殿で別れる際、彦火火出見尊に妊娠を告げていた豊玉姫は、妹の玉依姫を連れて海辺にやってきます。いよいよ出産というとき、豊玉姫は、彦火火出見尊に産屋を覗かないように懇願しますが、彦火火出見尊は約束を破って、龍の姿に化身して出産する豊玉姫をみてしまいます。これに激怒した豊玉姫は子ども

を海辺に捨てて帰ってしまいますが、その子が鸕鷀草葺不合尊です。さきの鹿葦津姫が彦火火出見尊を生む話とともに、出産にかかわる興味深い物語です。そして、この神が玉依姫を妃に迎えて生んだのが、のちの神武天皇、神日本磐余彦尊です。

◆こうした神話から、いったいなにがわかるのでしょうか。

日本神話がいいたことは、さきほども申し上げたように、神話の最後に登場する神武天皇が、国土を生成した伊弉諾尊・伊弉冉尊や、葦原中国にその支配者として降臨した瓊瓊杵尊の子孫である点にあると思います。つまり、『古事記』『日本書紀』の神話は、神武天皇とその子孫が代々日本を統治することの正統性を暗に主張しているわけです。

こうした神話をどのように捉えるかは、人によって考えかたが異なります。わたくしは、伊弉諾尊・伊弉冉尊が国土を作ったというような話は別にして、神話のなかには神武天皇以前の歴史を伝えた部分もあると思います。ただ、その証明はむつかしいです。

◆つぎに、巻第三の神武天皇の話をうかがいたいと思います。

はじめにちょっとお断りしておきます。「神武」とか「雄略」とかいうのは、奈良時代になってから贈られた名前ですが、便宜上これを使用します。また、「天皇」という称号についても、いつからはじまったものかは学界でも諸説あります。古くは「大王」、さらにそれ以前は単に「王」と呼ばれていたと考えられていますが、こうした称号の変化がいつのことかははっきりしないので、ここではすべて「天皇」と呼ぶことにします。

同様に「日本」という国号も、いつごろから倭国が日本となったのかはいろいろ説がありますが、ここでは「日本」で統一しています。

◆神武天皇と云えば、東征伝承が有名ですね。

そうです。磐余彦尊は、四十五歳のとき、高千穂宮にあって、兄弟や子たちと相談して、塩土老翁のいう東方の美しい国に都を移すことを決意し、水軍をひきいて日向を出発します。いまの大分県宇佐市のあたりで地元の豪族の歓迎をうけた一行は、宇佐から九州北岸に出て、遠賀川河口附近の岡水門にとどまります。ついで、瀬戸内海を東進、安藝国の埃宮から吉備国の高島宮に至り、ここに三年間とどまり、船舶や食料を準備します。

さらに東へ進んだ一行は、河内国の草香邑の白肩津に辿り着きます。草香邑は、いまの東大阪市日下町附近ですが、かつてはこのあたりまで海が迫っており、船で行くことができたのです。ここで陸行に切り替えた一行は、生駒山を越えて大和に入ろうとしますが、大和の豪族長髓彦の強い抵抗にあい、実現しません。そこで、やむなく進路をかえて、大阪湾沿いに南下します。途中、負傷した彦五十瀬命が紀国の竈山で亡くなり、ここで葬られますが、その後も紀伊半島沿岸を航行した一行は、熊野に上陸し、ふたたび大和を目指します。

◆そのあと、大和で即位するまでの道のりは、どうだったのでしょうか。

しかし、行く手を阻むものは跡を絶ちません。上陸後も苦難の連続でしたが、それを乗り越えた磐余彦尊は、いよいよ宿敵長髓彦との対決に臨むのですが、これも苦戦の連続です。しかし、最後は、長髓彦の仕える饒速日命（神武天皇即位前紀によれば、饒速日命は、神武天皇東征以前に天磐船に乗って天降ったという。長髓彦は命に仕え、妹を命に娶せている）が、磐余彦尊に刃向うことの無駄を悟り、長髓彦を殺して降伏します。餘勢をかって大和の多くの土蜘蛛を討伐した磐余彦尊は、畝傍山の東南の橿原の地に壮大な宮殿を造営して即位します。『日本書紀』によれば、辛酉の年の正月のことだったと云います。

◆神武天皇伝承についてはわかりましたが、この話は、歴史学の観点からみて、どんな問題がありますか。

この物語全体の枠組みになっている年代、すなわち干支の算定は、讖緯説にもとづいています。讖緯説というのは、中国古代の陰陽五行説などから発展し、そ

図３　竈山墓（五瀬命を祀る竈山神社の後方に位置する）

れに天文暦数をこじつけて後世に起こる事件を予言するというものです。この讖緯説によると、社会の変革には一定の周期があり、それは辛酉・甲子・戊午の年に起こるといいます。

こうした学説は、日本にも早くから伝わり、奈良・平安時代の知識人に滲透しました。干支は、六十年で一巡しますが、これを一元といい、二十一元すなわち千二百六十年を一蔀といいます。一元の交替には世の中に変化が起き、一蔀の交替にあたってはさらに大きな変化が起きると考えられていました。『日本書紀』の編者は、推古天皇九年、西暦六〇一年の辛酉（かのとり）の年を一蔀の始めと考え、そこから千二百六十年遡った辛酉の年、すなわち紀元前六六〇年を神武天皇の即位の年としたのです（一蔀のはじまりを推古天皇九年とすることには、異説もある）。

もちろん、こうした年代は、ほんとうのものではありません。しかも、神武天皇の即位の年を必要以上に古く設定したために、それにつられてほかの記事の年代も実際の年代よりもかなり古くなっています。たとえば、神功皇后や応神天皇のところでは実年代よりも百二十年古く設定された記事がみえています。

このように、実年代が確定しない現状では、神武天皇の研究は一筋縄ではいきません。皇室の祖先が南九州から大和に移ってきたという伝説がなにを意味するのかは、人によって解釈が岐（わか）れます。ただ、こうした神話・伝承がなんらかの史実を反映している可能性も否定はできません。

第三回【崇神天皇から神功皇后まで】

◆前回は、初代の神武天皇のお話までうかがいましたが、本日は、引き続き、『日本書紀』の具体的内容について、荊木さんにうかがいましょう。

神武天皇のあと、第二代綏靖天皇から第九代の開化天皇までは、記述も少なく、詳しいことはよくわかりません。しかし、第十代崇神天皇の治世になると、一転

して記事が豊富になります。しかも、四道将軍伝承など、ヤマト政権による国土の拡大が進んだことを示唆する記事が目につきます。

◆四道将軍伝承とはどのようなものでしょうか。

崇神天皇の巻には「天皇は、大彦命を北陸道に派遣し、武渟川別を東海道に派遣し、吉備津彦を西道（山陽道）に派遣し、丹波道主命を丹波に派遣し、それぞれに印綬を授け将軍に任命した」という記事があります。大彦命は孝元天皇皇子で、武渟川別はその子です。吉備津彦も孝霊天皇皇子と伝えられる人で、丹波道主命もやはり開化天皇皇子の日子坐王の子です。つまり、地方を平定するために王族が派遣されたということです。

四道将軍の派遣伝承そのものは、語り継がれていくうちに、こうしたまとまった形に落ち着いたと思われます。『古事記』では、吉備への派遣は三代前の孝霊天皇の時代のこととされていますが、このことは、四道将軍伝承が、最初は、かならずしもまとまったものではなかったことを示唆しています。ぎゃくに云えば、北陸・東海・丹波に吉備（西道）が加わり、四道将軍伝承となっているのは、伝承の完成された姿だといえます。

◆こうした王族将軍の伝承は、事実なのでしょうか。

たとえば、大彦命を例にとると、彼の進んだルートは、『日本書紀』に詳しい記述はありません。しかし、おそらくは、奈良県桜井市附近から伊賀地方を経て、近江から北陸方面に進んだのでしょう。注目したいのは、このルートに沿って、伊賀臣・阿閇臣・膳臣・狭狭城山君など、大彦命の系統をひく豪族の盤踞していたことです。

また、四道将軍が派遣されたという丹後半島や岡山平野には、四世紀代の巨大な前方後円墳がいくつも築かれていますが、これらの古墳についてはヤマト政権との密接な関係が指摘されていますから、考古学的にみても、四世紀にこれらの地方にヤマト政権の支配が及んだことは確実です。そう考えると、四道将軍伝承もまったくの作り話とは考えられません。『日本書紀』が記す崇神天皇の時代は、ヤマト政権が勢力を拡大した、劃期的な時期だったのではないでしょうか。

◆崇神天皇につづく垂仁天皇の時代にも劃期的な出来事が記されていますが、その代表的なものが、天照大神の伊勢鎮座ですね。

はい。崇神天皇の巻によると、それまで宮殿のなかにお祭りされていた天照大神は、天皇がその神勢を畏れたために、皇居を出て笠縫邑というところに祀られるようになったと云います。そして、垂仁天皇の二十五年になって、倭姫命を御杖代とし、鎮座地をもとめて宇陀の筱幡・近江国・美濃国の各地を巡行し、やがて伊勢国に至って、五十鈴川のほとりに「斎宮」を立てたとされています。

この垂仁天皇紀の記述については、いろいろ議論がありますが、わたくしはとくにこれを疑う必要は認めません。ただ、問題は、これが実年代ではいつごろのことかという点です。『日本書紀』の垂仁天皇二十五年は、西暦に換算すると紀元前五年、いまから二千年以上前のこととなりますが、前回お話したように、『日本書紀』のはじめのほうの年代は実際よりかなり古く設定されていますから、ほんとうはもっと新しい時代だと思われます。

そこでわたくしが注目するのが、垂仁天皇の陵墓に関する伝承です。

垂仁天皇の陵墓は、『古事記』『日本書紀』によれば、大和の菅原というところにあったといいます。今の奈良市尼辻西町あたりです。ご承知のかたも多いと思うのですが、ここには宝来山古墳という、四世紀後半に築造された巨大な前方後円墳が存在します。周辺にはほかに大きな古墳はありませんから、この古墳を、『古事記』『日本書紀』が垂仁天皇として描くヤマト政権の大王の奥津城にあてることは、けっして不当な解釈ではないと思います。そうなると、垂仁天皇は四世紀後半の人物ということになり、この時代のこととして伝えられる伊勢神宮の鎮座も、やはり四世紀後半のある時期と考えることができます。

◆もう一つ、景行天皇の時代の出来事についてもうかがっておきましょう。

『日本書紀』には、景行天皇自身による熊襲征伐や日本武尊の東征・西征の伝承が記されています。『古事記』では、日本武尊を中心として描くという方針から、彼の西征・東征伝承だけを採用しています。『古事記』が景行天皇の親征についてふれていないのは、材料とした帝紀ないしは旧辞には、日本武尊の事蹟しかなかったからでしょう。

これに対し、『日本書紀』は、古くからあった景行天皇の西征と日本武尊の東征を中心に、多くの伝承を統合し、それらを景行天皇西征→日本武尊西征→日本武尊東征の順に整理し、最後を、景行天皇が日本武尊を偲んで東国に行幸するという話で締め括っています。

◆日本武尊の征討伝承について、もう少し詳しくうかがいたいのですが。

日本武尊は、双子の兄とともに、景行天皇と播磨稲日大郎姫という播磨国の豪族の娘とのあいだに生まれたといいます。『日本書紀』によれば、彼は、日本童男とも呼ばれ、ひときわ勇壮な人物だったと記されています。

『古事記』では、日本武尊の熊襲征伐は、兄殺しというショッキングな話からはじまります。

景行天皇は、ある日、日本武尊に、「大碓命は、なぜ、朝夕の食事に出てこないのか、おまえがねんごろに教え諭してこい」と命じましたが、五日たっても大碓命は出仕してきません。天皇が日本武尊にそのわけを尋ねると、彼は「大碓命が厠にはいったところを捕らえ、手足をもぎとり、薦に包んで投げ捨てました」と事もなげに答えます。天皇は、日本武尊の荒々しさを恐れ、彼を遠ざけるために熊襲征伐を命じるのですが、この話は『日本書紀』にはみえません。『日本書紀』には、景行天皇の熊襲親征のあとをうけて、熊襲国に赴く勇ましい姿が描かれています。

日本武尊は、熊襲の首長川上梟師という――『古事記』では熊曾建兄弟となっていますが――土地の豪族の宴会に女性に扮してまぎれこみ、梟師を斬ります。

図４　渋谷向山古墳（景行天皇陵古墳）

梟師は、殺される直前、彼に「日本武皇子（やまとたけるのみこ）」の名を奉ったというのですが、これが、日本武尊の称号の由来です。

『古事記』では、日本武尊は、九州からの帰りに、出雲国に立ち寄って出雲建（いずもたける）という土地の豪族を倒したことになっていますが、この話は、『日本書紀』のほうには出てきません。

◆ヤマトに帰ると、こんどは、休む間もなく東国へ派遣されますね。

そうです。東国の蝦夷が叛乱を起こしたというので、景行天皇は日本武尊にその征伐を命じます。『日本書紀』には、天皇の命令に勇躍して東征に向かったとありますが、いっぽうの『古事記』は、「天皇は私なんか死んでしまえと思っていらっしゃるのだ」と嘆き、泣く泣く出発する弱々しい姿を伝えています。

伊勢神宮に参拝し、叔母の倭姫命から草薙剣（くさなぎのつるぎ）を授かった日本武尊は、駿河に至るのですが、そこで賊の焼き打ちに遭います。しかし、草薙剣の霊力で火を退け、ぎゃくに賊を焼き殺してしまいます。そして、相模に進み、そこから上総に渡ろうとしますが、こんどは暴風雨に苦しめられます。そのとき、日本武尊の妃弟橘媛（おとたちばなひめ）が、海神の犠牲となって入水（じゅすい）したため、暴風は止み、一行は無事接岸することができます。日本武尊は、そこから陸奥にすすみ、船に大きな鏡をかけて蝦夷に戦を挑みますが、彼らは戦わずして降服します。

その帰りに、日本武尊は、甲斐国の酒折宮（さかおりのみや）というところに滞在し、さらに甲斐から武蔵・上野を経て碓日坂で弟橘媛を偲んだといいます。信濃を経て尾張まで戻った彼は、近江の伊吹山（いぶきさん）の荒ぶる神を退治しようとして傷つき、大和に帰ることを望みながらも、ついに伊勢国の能褒野（のぼの）というところで歿するのです。

◆こうした『日本書紀』の記事は、信頼できるものなのでしょうか。

ここに紹介した崇神・垂仁・景行天皇の巻の記述からどれだけ史実が読み取れるかというのは、むつかしい問題ですが、まったくの伝承としてその史実性を否定するのもどうでしょうか。

崇神天皇や景行天皇が活動の拠点としていた三輪山山麓には、四世紀に築かれたとみられる行燈山古墳や渋谷向山古墳といった古墳が存在しますが、こうした大王陵とみられる巨大な前方後円墳の偉容をみると、ヤマト政権の躍進を語った記紀の伝承が、まったく架空だとは思えません。また、天照大神が各地を巡行したという伝承にしても、天照大神を奉斎するヤマト政権が東国へ進出した史実を反映したものだと考えれば、いちがいに荒唐無稽な物語とはいえません。

ちなみに、三重県の亀山市には、日本武尊の墓と伝えられる能褒野王塚古墳という巨大な前方後円墳が存在します。これは、考古学的にみても四世紀後半に活躍した王族の墓である可能性が大きいと考えられます。こうした古墳の存在は、日本武尊が蝦夷征討の帰路、この附近で亡くなったとする記紀の伝承ともよく合致しており、日本武尊の東征伝承のもとになった王族の存在を示唆しているように思います。

◆最後に、神功皇后についてうかがいたいと思いますが、まず、皇后で一巻を立てるという編成がおもしろいですね。

そうです。『日本書紀』は、天皇ごとに巻を立てているので、皇后のために一巻を設けているのは、異例です。神功皇后の巻では、魏志倭人伝を引用していますから、『日本書紀』の編者は、神功皇后が魏志倭人伝にみえる邪馬台国の女王卑弥呼のことだと考えていたのではないでしょうか。皇后をあえて天皇に見立てて一巻を立てているのも、そのせいかも知れません。『常陸国風土記』をみると、神功皇后のことを「天皇」と書いていたりしますから、神功皇后を歴代天皇の一人に数えるような認識が古くからあったようです。

◆では、神功皇后伝説について教えてください。

神功皇后は、第十四代仲哀天皇の皇后だったかたです。仲哀天皇の治世に熊襲が叛乱を起こしたので、天皇はこれを征伐するために筑紫に遠征します。橿日宮（かしひのみや）での作戦会議の最中に皇后に憑依した神が、「不毛の地である熊襲を討つ必要な

どない。それよりも財宝の豊かな新羅を討ちなさい。わたくしを祀れば新羅は帰服するだろう」と告げます。しかし、天皇はこの託宣を疑い、熊襲征討を強行しますが、勝利を収めることができずに、突如崩御してしまいます。そこで、今度は皇后が神の教えにしたがって新羅に出陣します。新羅は戦わずして降伏し、朝貢を誓い、皇后は凱旋を果たします。

◆神功皇后は、新羅を平定したあと、日本に戻って九州でのちの応神天皇を出産したといいますが、その後、皇子の異母兄弟が謀反を起こしたという話が出てきますね。

そうです。いわゆる麛坂王・忍熊王の叛乱です。

新羅出兵の際、神功皇后は誉田別皇子、のちの応神天皇を身ごもっており、陣痛をこらえて出陣しますが、筑紫に戻ったところで、応神天皇を出産します。

応神天皇が生まれた翌年、神功皇后は、皇子をともなって穴門の豊浦宮、いまの山口県下関市附近から大和に帰還しますが、そのとき、麛坂王・忍熊王兄弟が謀反を起こします。彼らの母は大中姫ですから、二王と応神天皇は、異母兄弟になります。二王は、皇后が筑紫で誉田別皇子を出産したことを知り、群臣がこの幼い皇子を天皇に立てるのではないかと不安をいだいたのです。

神功皇后摂政前紀によれば、兄の麛坂王は、菟餓野で戦の勝敗を占った際に、猪に喰い殺されてしまいますが、弟の忍熊王は、各地を転戦しながら、神功皇后の差し向けた数万の軍に抵抗します。しかし、最後は、琵琶湖沿岸まで敗走し、瀬田で入水します。

◆神功皇后伝説のだいたいのところはわかりましたが、この話の重要なところは何処でしょうか。

神功皇后の伝説は、複数の物語が時間をかけて融合したもので、なかなか複雑です。なかには御伽噺のような話もふくまれていますから、これらの話をすべて額面通りに受け取ることはできません。しかし、四世紀末にヤマト政権が朝鮮半島にまで進出したことは、高句麗広開土王碑文からも裏づけられますから、神功皇后の新羅征討もそうした海外派兵の事実を反映したものであると考えられます。

また、麛坂王・忍熊王の叛乱伝承も、塚口義信先生の研究によって、四世紀末に実際にあったヤマト政権内部の内部抗争を伝えたものであることが、次第にあきらかになってきました。こうした内紛は、朝鮮半島をめぐる外交政策の対立がきっかけのようです。考古学、とくに古墳の研究から、この時期、各地で政治集団の没落と新興勢力の擡頭という、権力の交代のあったことがわかっていますが、このことは、麛坂王・忍熊王の叛乱が多くの人々を巻き込んだ、大規模なものだったことを物語っています。

ところで、この内乱の際に、神功皇后・応神天皇を支援した勢力の一つに河内国古市郡を拠点とする、河内の政治集団がありました。その首長を品陀真若王といいますが、彼は、娘の仲津姫命の婿に応神天皇を迎えました。これがきっかけとなって、ヤマト政権はその拠点を大和から河内にシフトします。百舌鳥・古市古墳群が世界遺産に登録されましたが、五世紀になると、こうした巨大な前方後円墳が相次いで河内地方に築かれるようになるのも、そのためだといわれています。

第四回【仁徳天皇から継体天皇まで】

◆前回は、ヤマト政権が、次第にその勢力を拡げ、さらには四世紀末には朝鮮半島にまで進出していく過程についておうかがいしました。今日は、その後の『日本書紀』の記述についておうかがいしたいと思います。前回の最後に、五世紀になると、ヤマト政権が大阪平野に拠点を移すこというお話をうかがいましたが、難波といえば、仁徳天皇が有名ですね。

仁徳天皇は、応神天皇の皇子です。皇后の葛城磐之媛は、『日本書紀』によれ

ば、仁徳天皇二年三月、皇后に立てられたといいます。のちに四人の皇子を生みますが、そのうち、三人が皇位を踐(ふ)みました。同母の皇子が三人も即位したのはほかに例のないことですが、これは、磐之媛の父葛城襲津彦が、当代きっての実力者だったことと無関係ではないと思います。

磐之媛が葛城襲津彦の娘であったことは、『古事記』にも「葛城の曽都毘古の女、石之比売命(いわのひめのみこと)」とみえるとおりです。皇族以外の女性が皇后になったのは、彼女がはじめのことですが、こうした異例の措置も、葛城氏の権勢によるところが大きかったと思われます。後年、やはり、臣下の藤原光明子(こうみょうし)が聖武天皇の皇后に立てられたとき、天皇は、二百年以上もまえの磐之媛の故事を例に引いて「別段珍しいことではない」と勅していますが、いかにも苦しい辯解です。

◆磐之媛の話が出ましたので、さきにこの女性のことをお聞かせください。

この磐之媛は、嫉妬深い性格だったことで世に知られていますが、これは、後世の人物評ではありません。なぜなら、磐之媛のひととなりについては、すでに『古事記』に「たいそうやきもち焼きで、そのせいで、天皇の使っている侍女たちも迂闊に宮中に入ることができない」とあるからです。

『古事記』『日本書紀』には、彼女の嫉妬深さをうかがわせる話が、いくつも紹介されています。たとえば、『古事記』によれば、天皇が、吉備海部直(きびのあまべのあたい)の女黒比売(くろひめ)という女性を召し上げますが、彼女は、皇后の嫉妬を恐れて本国に逃げ帰ったといいます。また、『日本書紀』には、仁徳天皇は、女官だった桑田玖賀媛(くわたのくがひめ)という女性を家来たちに示して、「朕は、この婦女を愛したいと思うが、皇后の嫉妬が苦になって召すことができないまま何年も経ってしまった」と苦悩した話が載せられています。

◆仁徳天皇も、ずいぶん皇后の嫉妬心には気を遣っておられたわけですね（笑）。

こうした、磐之媛の嫉妬が絶頂に達するのが、天皇が八田皇女(やたのひめみこ)を宮中に召し入れたときです。『日本書紀』によってそのあらましを説明すると、以下のとおりです。

天皇は、八田皇女を召し入れようと皇后に相談しますが、当然のことながら、却下されます。

あるとき、皇后が紀国へ出かけたので、天皇は、そのスキをねらって八田皇女を宮中に召し入れます。しかし、皇后は、難波の港まで戻ってきたところで、この話を聞いて、大いに恨み、船を着岸させません。

そうとは知らず、天皇は皇后の船を待つのですが、皇后は港に停泊せず、淀川を遡って、木津(きづ)から倭(やまと)へと向かいます。翌日、天皇は家来を差し向けて、皇后に帰還を促しますが、皇后はそれを無視してなおも進み、木津川に至り、奈良山(ならやま)を越えて、そこから故郷の葛城を望んだといいます。

その後、ふたたび山城に戻って、筒城宮(つつきのみや)に落ち着いたので、天皇は、家来に説得にあたらせますが、皇后はこれを黙殺します。ついに、天皇みずからが山城に向かうのですが、皇后は、「八田皇女とならんで后でいたいとは思いません」といって、面会を拒絶したといいますから、なかなか頑固です。

結局、お二人は和解できないまま、皇后は、筒城宮で亡くなり、奈良山に葬られたといいます。

◆こうした皇后のエピソードから、なにを読み取ることができるでしょうか。

こうした、八田皇女の入内をきっかけに天皇と皇后が不仲になるという話は、歌物語の体裁をとっていて、いささか芝居がかっていますから、どこまで真実かは疑わしいところもあります。しかし、磐之媛の実家にあたる葛城氏の勢力を考えるうえで、興味深い点があります。

まず、磐之媛は筒城宮に住み、そこで亡くなったとされていますから、葛城氏が山城南部と深くかかわっていたことがうかがえます。

また、『古事記』によれば、天皇は、筒木宮の皇后のもとに丸邇臣口子(わにのおみくちこ)を派遣したといいますが、これも、葛城氏が、やはり山城南部を本拠地とする和珥氏と

結びついていたことを示唆しています。さらに、『古事記』も『日本書紀』も、磐之媛は、和珥氏の本拠の奈良山附近まで行って、故郷の葛城を望んだと書いていますから、これも、和珥氏と葛城氏とのかかわりを示唆しています。

おそらく、和珥氏と葛城氏とは、山城南部と葛城地方を結ぶルートをめぐって提携していたのだと思います。磐之媛が淀川・木津川を利用し、難波から山城南部に至ったことは、葛城氏がこのルートを確保していたことを示しています。

磐之媛は、許しを乞う天皇に対し、一歩も譲ろうとしませんでしたが、こうした強気の態度は、実家の権勢を恃（たの）む彼女の自負心のあらわれだといえます。

◆さて、つぎに仁徳天皇についてうかがいますが、『古事記』も『日本書紀』も仁徳天皇が徳の高いすぐれた天皇だったと記していますね。

仁徳天皇の在位は長期に及んだようで、『古事記』『日本書紀』には天皇にまつわる豊富なエピソードが残されています。なかでも、天皇が高臺から遠望して、民の竈（かまど）に煙が立たないのを知り、三年間免税したという話は有名です。天皇が、倹約を重ねつつ善政を施し、それによって、国民が豊かになるという、仁政（じんせい）ぶりは『古事記』『日本書紀』がともに記すところです。記紀は、このような仁徳天皇のことを「聖帝（ひじりのみかど）」と讃えています。

ただ、このような仁徳天皇の人物像は、葛城氏と親密な関係にある仁徳天皇から履中天皇に至る系統を正統とする、最初の帝紀の性質に由来するようです。そのため、こうした思想を引き継いでいる『古事記』『日本書紀』の記述を鵜呑みにすることはできません。

しかし、現在仁徳天皇の陵墓として有力視されている上石津ミサンザイ古墳は、宮内庁が仁徳天皇陵として管理する大仙（だいせん）古墳（墳丘長四八六メートル）ほどではありませんが、墳丘長三六五メートルの巨大前方後円墳です。その偉容をみれば、当時のヤマト政権の力が巨大であったかがわかります。

◆中国の歴史書によれば、この時代、倭の五王と呼ばれる権力者が南朝の宋に使者を派遣していますが、彼らは『日本書紀』のどの天皇にあたるのでしょうか。

南朝の宋の歴史を記録した『宋書』という書物には、四二一年から四七八年にかけて、讃・珍・済・興・武と称する五人の王が宋に使者を派遣し、皇帝から爵号を授与された記事が、都合十一回もみえています。いわゆる倭の五王です。

このうち、済・興・武の三王については、記紀の系譜と照合して、済＝允恭天皇、興＝安康天皇、武＝雄略天皇であることが、ほぼ定説となっていますが、讃・珍については諸説あってはっきりしません。五王のうち、興以外の四王は最終的に「使持節、都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大将軍、倭王」に任じられたようです。歴代の倭王は、こうした南朝の権威を後ろ盾に、高句麗に対抗しようとしたのですが、実質的な効果は乏しかったようです。彼らの努力にもかかわらず、五世紀後半から六世紀にかけて、朝鮮半島における日本の権益は後退の一途を辿ります。

ところで、『日本書紀』は、こうした南朝との交渉については、一切ふれていません。『日本書紀』を作ったひとたちが使者の派遣を知らなかったはずはありませんから、ちょっと不思議ですが、ヤマト政権の大王が中国に朝貢したことを不名誉に思い、わざと載せなかった可能性が考えられます。

◆このあとの『日本書紀』を読み進めていくと、骨肉相食むとでもいうべき皇位継承争いが続きますね。

おっしゃるとおりです。『古事記』『日本書紀』によれば、五世紀のなかごろから六世紀前半にかけては、皇室内部で皇位継承をめぐる骨肉の争いが、絶え間なく続いたといいます。仁徳天皇のあと、履中・反正・允恭という磐之媛が生んだ皇子があいついで即位し、兄弟による皇位継承が定着しますが、こうした兄弟による皇位の継承が、皇位をめぐる争いに拍車をかけたようです。

まず、履中天皇や允恭天皇は、皇位継承の資格のあるものを殺害したり、自害に追い込んだりしていますが、もっとも残虐なふるまいをしたのは、雄略天皇で

す。独断に陥りやすく、誤って人を殺すことが多かったので、世間では、この天皇のことを「大だ悪しくいます天皇」と評したと『日本書紀』にあります。

天皇は、允恭天皇の第五皇子で、母は忍坂大中姫命。安康天皇の同母弟にあたりるのですが、兄の安康天皇は、根使主の讒言を信じて伯父の大草香皇子を殺したために（第一回参照）、みずからも大草香皇子の子眉輪王に殺害されます。弟の雄略天皇は、この報に接し、たいへん驚くとともに、兄たちを疑い、まず、兄の八釣白彦皇子を殺害します。そして、おなじく兄の境合黒彦皇子や、従兄弟にあたる眉輪王にもその矛先を向けます。二人は、相談して葛城円大臣の家に逃げ込みますが、雄略天皇は、兵を起こして円大臣の家を囲み、彼らを焼き殺してしまいます。

◆たしかに、すさまじい争いですね。

雄略天皇の残虐ぶりは、その後も止まるところを知りません。安康天皇が市辺押磐皇子を皇位継承者に予定していたことを恨み、皇子を騙して狩りに誘い出して殺害し、おなじころ、皇子の同母弟の御馬皇子も殺害しています。

こうして兄弟の排斥に成功した雄略天皇は、泊瀬の朝倉において即位を果たすのですが、血で血を洗う抗争は、結果的に、皇室の弱体化を招き、ついには皇位継承者にもこと欠くありさまでした。『日本書紀』によれば、雄略天皇の子の清寧天皇には皇子がなく、殺された市辺押磐皇子の子で、播磨国に身を隠していた顕宗天皇と仁賢天皇の兄弟が発見されて、いったんは皇位断絶の危機をのがれました。しかし、仁賢天皇の子の武烈天皇にも皇子がなく、ここに至って、ついに仁徳天皇の皇統は途絶えてしまいます。

◆仁徳天皇の系統の最後に立った武烈天皇について、『日本書紀』はずいぶん暴虐な天皇だったと書いていますが、ほんとうのところはどうなのでしょうか。

『日本書紀』には初代の神武天皇にはじまり、のべ四十一人の天皇ことがみえますが、そのなかでも、とりわけ悪逆無道の暴君に描かれているのが、武烈天皇です。気性が激しく、多くの人を殺したという点では雄略天皇も「暴君」ですが、雄略天皇の弑逆の場合、多くは皇位継承争いをめぐる大王家の内紛が原因ですから、それなりに理由のあることといえます。これに対し、武烈天皇の場合は、無辜の民に対する暴虐ですから、その印象は強烈です。

武烈天皇紀をひもとくと、たとえば、妊婦の腹を割いて胎児をみただとか、人の爪を抜いてイモを掘らせたとか、人を木に登らせて弓で射殺したとかいった、目を覆いたくなるような話が目立ちます。ほかにも、民衆の苦しみをよそに奢侈のかぎりを尽くしたことが記されていますから、これらの記述が事実だとすると、武烈天皇は異常な性格の持ち主だったということになります。

◆これらの記事は、事実を伝えたものでしょうか。

結論からさきにいうと、いま紹介した『日本書紀』の記事は、『日本書紀』の編者が武烈天皇をことさら悪者に仕立てるために造作したものと考えられます。実際に武烈天皇がこのような行為をおこなったのではありません。

なぜなら、『古事記』の武烈天皇段には、こうした残虐行為や贅沢三昧の生活ぶりについてはいっさい記述がないからです。

あとでもお話ししますが、じつはこうした『古事記』の記載こそが武烈天皇の実像を伝えた古い記録であって、『日本書紀』には、かなり潤色や改変のあとがみられます。

◆では、『日本書紀』は、どうして武烈天皇をことさら貶めるような書き方をしているのでしょうか。

これは、『日本書紀』という書物の成り立ちとかかわりがあると思います。

前にもお話ししましたが、『日本書紀』は、天武天皇の勅命によって六八一年に編纂が開始され、持統天皇朝・文武天皇朝・元明天皇朝を経て、元正天皇朝の養老四年、七二〇年に完成した歴史書です。ここで注意したいのは、編纂に関与した五人の天皇は、すべて継体天皇を直接の始祖とする皇統に属する天皇で、武

烈天皇とは皇統を異にしているという点です。武烈天皇には男子がなく、やむなく越前から応神天皇五世孫の継体天皇が迎えられて即位することはあとでふれますが、武烈天皇は断絶した皇統の最後の天皇でした。

継体天皇系の皇統に属する人々は、断絶した皇統の最後にくる武烈天皇をことさら悪者に仕立てることによって、継体天皇の皇統のイメージアップを図ったのだと思います。

こうした思想は、中国からきたものです。夏の桀王・殷の紂王など、不徳の帝王があらわれ、国を滅ぼし、王統もそこで杜絶えるという話は、中国に古くからあります。『日本書紀』編者が武烈天皇を悪く描いているのも、こうした中国の革命思想の模倣だといえます。武烈天皇紀の暴虐行為の描写が中国の典籍からの引き写しであることは、それを裏づけています。

◆『日本書紀』の武烈天皇に関する記述にフィクションが多いとすると、武烈天皇はほんとうに実在の人物なのでしょうか。

たしかに、一枚一枚ベールを剥いでいくと、武烈天皇は実在したのかという疑惑が生じてきます。しかし、暴虐記事がデタラメだからといって、ただちに武烈天皇は実在の人物でなかったと考えるのは、早計です。

『古事記』『日本書紀』に記される歴代天皇の系譜や事蹟は、六世紀のなかごろに書かれた帝紀に依拠していると考えられます。したがって、武烈天皇についても、その系譜や宮の所在地や、あるいは太子がいなかったことなどは、もとの帝紀に記されていたと考えてよいと思います。

そもそも、武烈天皇は五世紀末から六世紀初頭にかけての天皇であり、これは、最初の帝紀の編纂された欽明天皇の時代からたかだか数十年前のことです。けっして忘却されてしまうような古い時代の出来事ではありませんし、事実を歪めて書くことさえむつかしかったと思われます。ですから、武烈天皇という大王がいたことは認めてよいと思います。

ちなみに、武烈天皇の陵墓は、現在、宮内庁が管理している奈良県香芝市小泉の武烈天皇陵ではなく、おなじ香芝市狐井に位置する狐井城山古墳が相応しいということが、最近の研究によってわかっています。

◆武烈天皇のあと、つぎの天皇がなかなか決まりませんが、最終的に擁立されたのは継体天皇ですね。

そうです。困った大伴金村ら群臣は鳩首協議のうえ、越前国にいた男大迹王を迎えます。王は、応神天皇五世孫といった、皇族としてはまったくの傍系でしたが、そのような遠縁の王族を天皇に迎えねばならないほど、候補者が不足していたのです。

もっとも、男大迹王を擁立したほんとうのねらいは、王のもつ政治力や経済的基盤を取り込むことにあったようです。最初、王は首を縦にふりませんでしたが、やがて河内馬飼首荒籠の助言によって承諾し、樟葉宮、今の大阪府枚方市樟葉附近で即位します。

しかし、その後もただちに大和に入らず、山背の筒城、弟国と宮処を転々とし、即位後、じつに二十年（七年という異説もある）ののち、ようやく磐余玉穂宮で政治をおこなうことができました。天皇が長い間大和入りを果たせなかったのは、大和や河内の豪族のなかに、他所からきた天皇を快く思わない一派があり、彼らが天皇の大和入りを邪魔していたからでしょう。継体天皇が名実ともに「大王」として認められるのは、前王統の血を引く仁賢天皇皇女の手白香皇女と結婚してからのことです。

◆継体天皇が応神天皇の五世孫というのは、信じてよいのでしょうか。

たしかに、『日本書紀』は、継体天皇を応神天皇の五世孫としながらも、その中間の系譜を記していません。そこから、「五世の孫」という記述は、皇族の範囲が四世王から五世王にまで拡大された慶雲三年、七〇六年の二月以降に捏造されたものだとする説があります。

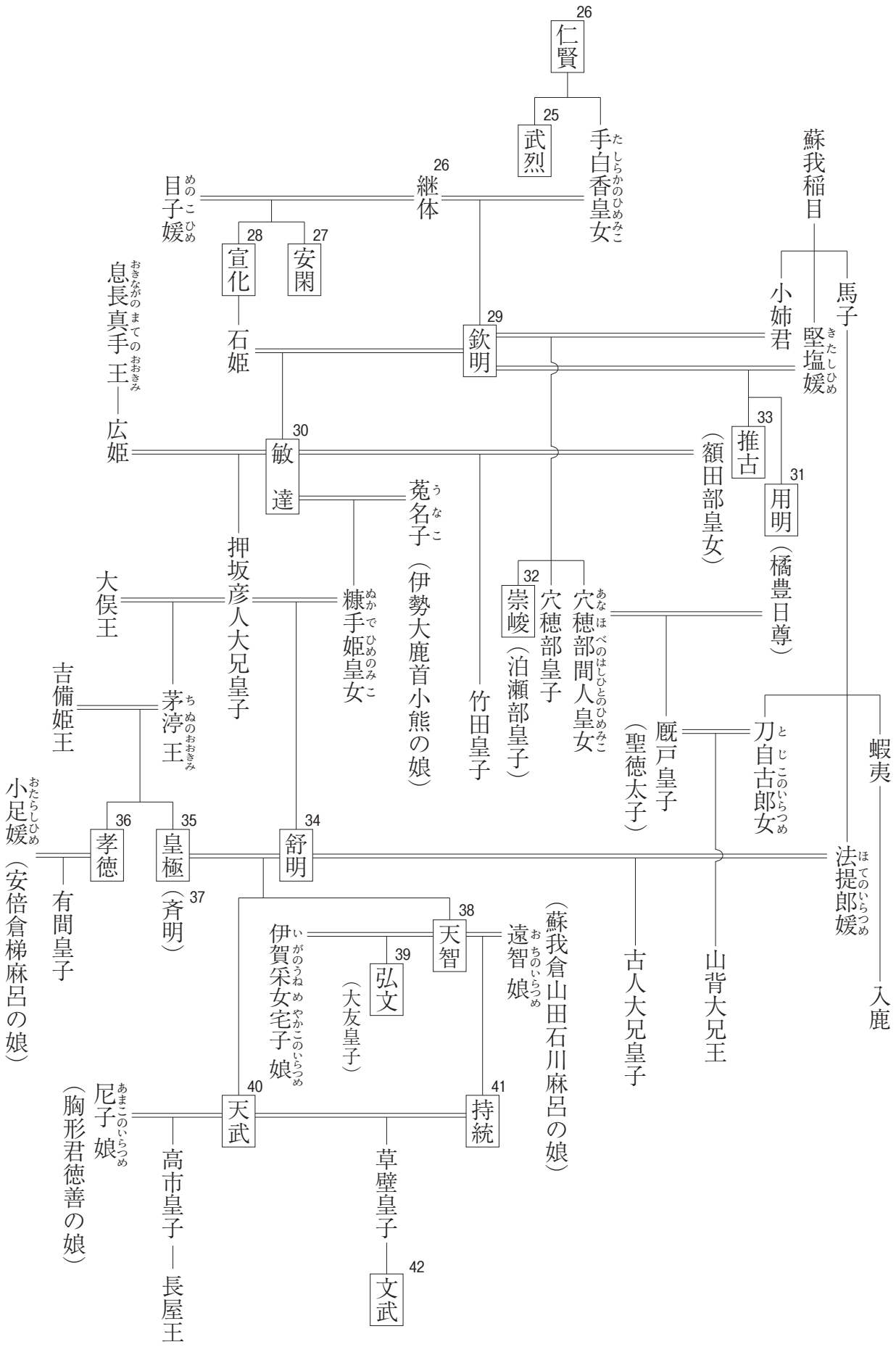

図５　天皇系図（仁賢天皇～文武天皇間）

図６　狐井城山古墳（武烈天皇陵として有力視されている）

この説は、戦後の一時期、きわめて有力でしたが、現在では下火です。なぜなら、『釈日本紀』所引の「上宮記曰く一に云う」（推古天皇朝前後の時期、おそくとも七世紀末までに成立）に引かれた継体天皇の系譜が信憑性の高いものであることが、あきらかになってきたからです。これによると、天皇は、近江国坂田郡、現在の滋賀県米原市附近に土着していた王族の末裔である彦主人王と、越前国の三国、現在の福井県坂井市附近に本拠をおく一族の娘振媛のあいだに生まれたということがわかります。

第一回のときにお話した『日本書紀』の「系図一巻」には、継体天皇の詳しい系譜が掲げられていた可能性はあります。なお、『古事記』も継体天皇の系譜を載せていません。ある天皇の五世の孫が即位するのはほかに例のないことですから、応神天皇五世の孫と書くだけでじゅうぶんだったのではないでしょうか。

◆継体天皇の時代の大きな事件としては、百済に任那四県を割譲したことがあげられますが、これに関聯して、九州で筑紫君磐井が兵を挙げたことも注目されますね。

『日本書紀』によれば、継体天皇の二十一年、五二七年六月に、天皇は、新羅に破られた任那の故地を再興するために、近江毛野という人物を将軍に任命して、六万の兵を任那に派遣します。ところが、新羅は、筑紫の国造磐井に賄賂を贈り、毛野の軍の渡航を防ぐよう要請します。磐井はかねてから叛逆を企てていたといいますから、ヤマト政権に対してなんらかの不平・不満があったのでしょう。磐井の支配地の九州北部は、大陸侵攻の基地として、ことあるごとに大きな負担を強いられたので、あるいは今回の派兵にも批判的だったのかも知れません。

事態を重くみた天皇は、物部麁鹿火を大将軍として筑紫に下向させ、その征討を命じます。麁鹿火は、翌二十二年十一月に筑紫の御井、現在の福岡県久留米市・小郡市附近で磐井の軍勢と交戦します。両軍は必死に戦い、おたがい一歩も譲りませんでしたが、最後は麁鹿火が磐井を斬ります。十二月には、筑紫君葛子

が、父磐井に連坐して誅されるのを恐れ、糟屋屯倉を献上して許しを乞い、ここに乱は終熄をみます。

◆今日は、仁徳天皇から継体天皇に至るまでの『日本書紀』の内容についてうかがいましたが、この時代を総括すれば、どうなるでしょうか。

朝鮮半島では、五世紀の中頃から高句麗の勢力が強大となり、新羅も法興王の時代になると、南下政策を進め、日本の支配権は五世紀も後半になると、次第に後退します。

このころ、国内でも、皇位継承をめぐる争いが激化したことは、さきほどお話したとおりです。倭の五王の最後の「武」とみられる雄略天皇などは、ライバルである王族を何人も殺害したので、ヤマト政権は弱体化します。武烈天皇が亡くなったあと、大和には適当な皇位継承者がおらず、はるばる越前から応神天皇五世の孫というような遠縁の王族を迎えねばならなくなったのは、皮肉なことです。

ただ、広域にわたるネットワークと強力な経済的基盤をもつ、この天皇を迎えたことで、ヤマト政権は息を吹き返します。継体天皇の在位中に勃発した磐井の乱を鎮圧できたのも、けっして偶然ではないと思います。

第五回【聖徳太子から大化改新へ】

◆『日本書紀』を取り上げたお話も、今日が最終回ですが、今日はどのようなことをうかがえるのでしょうか。

『日本書紀』は、あとになればなるほど記事が正確で、しかも詳しくなりますから、最終回の今日は駆け足になることをお許しいただきたいのですが、何人かのキーパーソンになる天皇や皇子を取り上げ、六、七世紀の日本についてみていきたいと思います。

◆まずは、推古天皇と聖徳太子についておうかがいします。推古天皇の治世には皇太子として聖徳太子が活躍したと云われていますが、これについてはどのようにお考えですか？

はじめに断っておきますと、「聖徳太子」というは、後世の称え名で、本来の名前は厩戸皇子です。ただ、一般には聖徳太子のほうがよく知られているので、ここでは「聖徳太子」と呼んでおきます。聖徳太子は、用明天皇の皇子で、『日本書紀』には推古天皇はみずから政治を執らず、彼にすべてのことを任せたとあります。

超人的な活躍をした聖徳太子ですが、これは『日本書紀』が作り上げた偶像だとする説があります。いわゆる「聖徳太子虚構説」で、昨今では有力な学説です。ただ、わたくし個人は、この説に疑問を感じています。なぜなら、推古天皇が亡くなったあと、聖徳太子の子どもの山背大兄皇子は、田村皇子とともに、つぎの天皇の有力な候補者にあげられているからです。彼が有していた「大兄」という称号は、天皇の第一子に与えられるもので、この称号をもつ皇子はおおむね即位しています。ですから、山背大兄皇子がこうした称号をもって呼ばれていたことは、彼の父・聖徳太子も天皇に準ずる有力な王族であったことを示唆しています。そこから判断すると、厩戸皇子は推古天皇の時代の実力者だったとみてよいのではないかと思います。

◆聖徳太子といえば、まず、仏教興隆に尽力されたことが有名ですね。

そうです。推古天皇朝には、蘇我馬子とともにさまざまな事業に取り組む聖徳太子の姿が描かれていますが、最初にみえるのが、仏教興隆です。仏教は、これより先、欽明天皇の時代、すなわち六世紀前半に百済から伝えられたといいます。欽明天皇のあとに即位した敏達天皇は、仏教の受容に消極的でしたが、聖徳太子の父である用明天皇ははじめて仏教に帰依した天皇です。蘇我馬子が仏教の受容に積極的だったのに対し、物部守屋は反対派の立場を貫き、これが引き金となって二人が鋭く対立したことは、よく知られています。

聖徳太子は、推古天皇の十二年、六〇四年に憲法十七条を作ったといいます。この憲法では、はじめのほうに重要事項をおいていますが、その第二条に「篤く三宝を敬え。三宝とは仏・法・僧なり」とみえています。ここに三宝をもってこの世の悪を正すという現実的・政治的な効果が強調されていることは、太子が、国家体制を確立するために仏教を利用しようと考えていたことを示しています。

◆新羅征討と聖徳太子の関係については、いかがお考えですか。

仏教興隆が推古天皇朝全体を貫く大方針だったのに対し、初期の具体的な施策として注目されるのが、新羅征討です。六世紀を通じて、日本の勢力は朝鮮半島から大きく後退しました。継体天皇の六年、五一二年には百済に任那四県を割譲していますし、欽明天皇の二十三年、五六二年には新羅が大加羅国を滅ぼし、ついに任那は滅びます。新羅を討って任那を復興することは、欽明天皇の遺言であり、それを実行することは、あとをついだ用明天皇や崇峻天皇の悲願でした。しかし、不運が続き、結局、新羅を撃破することはかなわず、任那は回復できないままでした。

推古天皇朝における二度の新羅征討計画において、来目皇子や当麻皇子といった聖徳太子の兄弟が将軍に任じられていることは、太子みずからがこの計画に深くかかわっていたことをうかがわせますが、いずれも不首尾に終わったことは事実です。以後、推古天皇紀には新羅征討のことはみえず、一転して、内政改革に関する記事が多くなりますが、これは、太子の方針転換なのかも知れません。

◆内政の改革にも力を入れたといわれますが、その点はいかがでしょうか。

聖徳太子は、推古天皇の十一年、六〇三年ごろから内政改革に乗り出したと思われますが、具体的な施策として打ち出されたのが、冠位十二階の制定、憲法十七条の発布、国史の編纂などです。

推古天皇の十一年、六〇三年に施行された冠位十二階は、直接には朝鮮半島の三国の制度に範をとったものですが、具体的には、色のちがう冠を臣下のものに与え、それによって身位の上下を明確にしたものです。冠位はそれまでのカバネにかわるものですが、カバネとちがい、はたらきに応じて昇転がありましたから、国家に対する忠誠心や奉公の気持ちを高揚させる効果があったと思われます。ただ、蘇我氏をはじめ、有力豪族にこの冠位を授けた形跡がありませんから、この制度には限界があったようです。

憲法十七条のことは、さきにもちょっとふれましたが、推古天皇の十二年、六〇四年に制定されたもので、『日本書紀』はその全文を掲載しています。この憲法十七条は、儒家・法家の思想をベースにした政策を示していますが、のちの律令にくらべると、むしろ訓令としての色彩が濃く、具体性を欠いています。

◆推古天皇の時代といえば、隋との国交も見逃せませんね。

そうです。新羅征伐や任那復興では捗々しい成果をあげられませんでしたが、対隋外交は注目すべきところがあります。『隋書』倭国伝によれば、推古天皇の八年、六〇〇年に日本から使者が来たといいますが、これに対応する『日本書紀』の記録はありません。

『日本書紀』と『隋書』の記録が一致するのは、推古天皇の十五年、すなわち西暦六〇七年の遣使です。小野妹子によって煬帝にもたらされた「日出ずる処の天子、書を日没する処の天子に致す。恙無きや」という書き出しの国書は、あまりにも有名です。従来の服属的外交をやめ、対等な立場での国交を展開しようとしたことのあらわれとして、しばしば取り上げられる記事です。当時、隋は高句麗討伐計画しており、その牽制のためにも日本を利用したいという思惑があったのでしょう。煬帝は、無礼な国書に対して怒りを露にすることはせず、翌年には、小野妹子に附して裴世清を日本に送っています。

小野妹子は、推古天皇の十六年、六〇八年にこの裴世清を送ってふたたび隋にわたっています。二度目の国書のことは『日本書紀』にみえますが、ここにも「東の天皇、敬んで西の天皇に白す」とあって、対等外交の精神が堅持されています。

◆遣隋使は、何度派遣されていますか。

回数については、諸説あります。はっきりした回数がわからないのは、『日本書紀』と『隋書』の記録がうまく一致しないからです。

いずれにしても、遣隋使は複数回派遣されています。こうした外交の背景には、先進国隋の進んだ政治や文化を学ぼうとする意図が働いていたと思われます。随行した留学僧や留学生は、のちに本国に召還され、律令国家の建設に貢献します。推古天皇の三十一年、六二三年に帰朝した医恵日は、留学生らを召還することや、隋にかわった唐と国交を開くこととを朝廷に奏聞しています。

推古天皇のあとを受けた舒明天皇は、即位後まもなくの舒明天皇二年、六三〇年に、この恵日を第一回の遣唐使として派遣しています。そして、舒明天皇十二年、六四〇年には、中臣鎌子や中大兄皇子に大きな影響を与えたと思われる南淵請安や、のちに大化改新の新政権が発足した際、国博士として活躍する高向玄理が帰朝しています。かれらが、向こうで見聞した東アジアの動静や、唐のすぐれた文化は、当時蘇我氏のふるまいをこころよく思っていなかった朝廷内部の人間に、わが国にも政治的改革が必要であることを痛感させたことでしょう。

◆つぎに中大兄皇子についてうかがいます。中大兄皇子といえば、中臣鎌足とともに蘇我氏を打倒したことで有名ですが、この事件について教えてください。

蘇我氏の専横に憤りを感じていた中臣鎌足は、中大兄皇子に心を寄せ、接近の機会をうかがっていました。法興寺の打毬（まりうち）の会で、中大兄皇子の沓を拾ったことをきっかけに皇子に近づき、クーデターの計画を打ち明けたエピソードは、有名です。

こうして手を組んだ鎌足と中大兄皇子ですが、二人は、蘇我倉山田石川麻呂をはじめ、佐伯子麻呂や葛城稚犬養網田をつぎつぎと仲間に引き入れ、皇極天皇四年、西暦六四五年の六月、ついに大極殿で入鹿を殺害します。三韓が調を進上する日に、まず、宮中で入鹿が斬られ、ついで甘樫岡に蝦夷を攻め滅ぼしたという『日本書紀』の叙述は真に迫っており、あたかも一場のドラマを観るかのようです。

◆こうしてみると、蘇我氏本宗家の没落は、まことにあっけないものですね。蘇我氏打倒に成功した中大兄皇子は、律令国家の建設を進めていくわけですか。

ここからの動きは迅速ですね。この乙巳の変の直後に皇極天皇は軽皇子に位を譲り、孝徳天皇が誕生します。この日、さらに新政権の首脳陣が発表されるとともに、あらたに「大化」という年号が建てられます。この時の首脳陣のスタッフは、中大兄皇子を皇太子としたのを筆頭に、阿倍内麻呂を左大臣に、蘇我倉山田石川麻呂を右大臣に、中臣鎌足を内臣に、それぞれ任じました。また、僧旻と高向玄理の二人を国博士に任じて、国政上の顧問としています。

こうした改新の新政府は、あらかじめ準備していたかのような周到さをもって、矢継ぎばやに新しい政策を発布していきますが、『日本書紀』の大化元年以降の記事には、そうした改革案が数多くみえています。改新の翌年、すなわち大化二年、六四六年に出された「改新の詔」は、そうした改新政府の基本方針をまとめた総合的なプランとして、よく知られています。

◆「改新の詔」については、学界でもこれを疑問視する声があるとうかがっていますが。

おっしゃるとおりです。「改新の詔」は、前後に出た他の法令と比較すると、整いすぎている感じを受けますし、全四項目のうち二項目以下の副文のなかには、のちの大宝令や養老令と同じ文があり、また、これらの法令の存在を念頭におかないと、意味のとれない文があります。そこから、「改新の詔」がほんとうに大化二年当時のものかどうかを疑う研究者も多いのです。しかし、詔には独自の内容もふくまれていますから、大化二年に「改新の詔」の原形となる政策が打ち出されたと考えてよいでしょう。

◆ただ、こうした政治改革もなかなか思うように進まず、中大兄皇子も苦労され

たようですが。

そうです。すべてを刷新するために、難波に宮を移し、大規模な宮都（難波長柄豊碕宮）を築いたのですが、白雉四年、六五三年、中大兄皇子は皇極上皇・間人皇后・大海人皇子とともに飛鳥に引き上げます。難波に一人置き去りにされた孝徳天皇は失意のうちに崩御しますが、改新政府の内部分裂を象徴する出来事です。

その後、皇極上皇が重祚しますが（斉明天皇）、この天皇の治世の六年、すなわち六六〇年に唐と新羅の連合軍に攻められて、百済が滅亡します。百済は、日本に救援軍の派遣を乞う使者を送り、あわせて人質として日本にいた王子余豊璋（よほうしょう）を国主に迎えたいと願い出ます。

斉明天皇は、これを容れて自身も陣頭に立って筑紫に出向きますが、翌年七月、朝倉宮で突如崩御します。それでも救援軍は派遣されるのですが、六六二年の白村江の戦で大敗し、這う（ほ）這うの体で撤退することになるのは、ご承知のとおりです。

中大兄皇子は、即位もしないまま、国防に追われ、六六七年には都を近江大津宮に遷します。幸い、唐との和平が成立しますが、国内を安定させることに忙殺されます。即位が実現したのは遷都の翌年のことで、即位してからわずか四年で崩御しましたから、心労が重なったことが死期を早めたのかも知れません。

◆残り時間も少なくなりましたが、『日本書紀』の最後を飾る天武天皇・持統天皇の巻についてうかがいたいと思いますが、天武天皇についてはなんと云っても、壬申の乱ですね。

『日本書紀』は天皇一代で一巻を立てることを原則としていますが、天武天皇紀は上下二巻から構成されています。このうち、上巻は、全篇壬申の乱の記述です。これは、壬申の乱がひじょうに重要な事件であったことに加えて、乱に関する記録がたくさん残っていたことが原因のようです。

天智天皇は、亡くなる直前に大海人皇子、のちの天武天皇を病床に呼んで、つぎの天皇に指名します。しかし、天智天皇の真意が愛息・大友皇子の即位にあっ

図７　壬申の乱関係地図

たことを知る大海人皇子は、天智天皇の申し出を断り、吉野に隠棲します。

しばらくは吉野に逼塞していた皇子ですが、その後、近江から不穏な情報がもたらされるに及んで、先手を打って大友皇子打倒を決意、自身の支持基盤である美濃国を目指します。この決断力と、迅速な行動が功を奏し、大海人皇子はこの戦いに勝利するのですが、これが壬申の乱のあらましです。

◆乱後の世界は、どうなりましたか。

多くの人々を巻き込んだ内乱は、たんに勝者の大海人皇子がつぎの天皇になったというだけでなく、その後の国家の方向性を決定しました。それほど、乱の歴史的意義は大きかったといえます。

壬申の乱で反対派勢力を一掃した天武天皇は、大化改新や百済の救援で苦労した天智天皇にくらべると、思う存分手腕をふるう立場にありました。巻二十九の天武天皇紀の下巻や、つづく持統天皇紀をみればあきらかなように、律令国家の基礎になる事業や制度の多くが、この時代にはじめられています。天武天皇が取り組んだ事業はいろいろな方面にわたりますが、神事・仏事の興隆や、民生の安定、法律の整備がつぎつぎと実行に移されました。

なかでも、天武天皇が着手して、持統天皇の時代に施行された飛鳥浄御原律令（ただし、律が完成・施行されたかは疑問がある）は、のちの大宝律令や養老律令のもといになった、重要な法典として注目されます。天武天皇は、その制定に際して「わたくしは、今から更に律令を定め、法式を改めようと思う」と詔していますが、じつは、こうした、体系的な法律の整備は、亡くなった兄の天智天皇の悲願だったのです。天武天皇は、はからずも兄に背くかたちで皇位につきましたが、天智天皇が敷いた路線を自分なりに継承していこうと考えていたのです。ですから、この詔も、そうした天武天皇の気持ちのあらわれとみてよいかと思います。

なお、初回にのべましたように、『古事記』や『日本書紀』の編纂に着手したのも、この天武天皇です。天皇は帝紀や旧辞の正説を立てることによって、自分自身の正統性を主張しようとしたのではないでしょうか。

◆『日本書紀』は持統天皇の巻で終わっていますが、これについてなにかコメントはありますか？

持統天皇は、天武天皇の皇后だった女性で、亡き夫・天武天皇の遺志を忠実に継承しました。天武天皇の在位中には完成しなかった、いろいろな事業がこの時期に成就し、律令国家の基礎が確立するという点では、持統天皇朝は注目すべき時代です。

◆五回にわたってうかがってきた『日本書紀』のお話もこれで終わりですが、最後になにかあれば、おうかがいします。

『日本書紀』は漢文で書かれていて、その内容は一般のかたには難解だと思うのですが、今はよい注釈書や現代語訳も出ているので、ぜひ親しんでほしいと思います。『日本書紀』には、わたくしたちの祖先が日本という国の誕生と発展をどのように捉えていたかが、よく示されています。ですから、『日本書紀』は、日本人がみずからのアイデンティティを確立するうえで、大きな拠りどころになるはずです。

『日本書紀』に記されたことがらについては、戦後、これを疑問視したり、あるいは否定する学説が主流を占めていましたが、研究が進むと、かならずしもデタラメや架空のお話ばかりではないことがわかってきました。これからもっと研究が進むと、いろいろなことがわかってくるのではないかと思います。わたくし自身も、微力ながら『日本書紀』の研究を深めていきたいと思っています。

拙いお話でしたが、どうもありがとうございました。

附表　『日本書紀』各巻の編成とおもな内容

巻	天皇	年号	事件
1	神代上		①最初に登場する神を『日本書紀』は国常立尊とするが、『古事記』では天御中主神。『日本書紀』では、国常立尊→国狭槌尊（クニノサツチ）→豊斟渟尊（トヨクムヌ）の３神（陽気のみによって生まれた独神）のあと、男女の対偶神４代がつづくが（神世七代）、その最後に登場するのが、伊弉諾尊・伊弉冉尊。 ②この２人が磤馭慮嶋で夫婦の契りをかわし、大八洲国を生み、天下の主者としての四神（天照大神・月夜見尊・蛭子・素戔嗚尊）を生む。 ③天照大神と素戔嗚尊は誓約によって子を生むが、乱暴が過ぎて天照大神を天石窟に籠らせたので、根国に追放。 ④素戔嗚尊は根国に向かう途中、出雲で八岐大蛇を退治する。素戔嗚尊の子孫の大国主命の活躍は、『日本書紀』にはない。
2	神代下		⑤天照大神の孫の瓊瓊杵尊を葦原中国の主とするために、大己貴神と国譲りの交渉をおこなう。 ⑥その結果、大己貴神は出雲に退き、天孫・瓊瓊杵尊は高千穂峰に降臨。 ⑦瓊瓊杵尊は、笠狭の碕で鹿葦津姫と結婚し、産屋に火を放ちつつ彦火火出見尊らを生む。 ⑧山幸彦・海幸彦の話。 ⑨彦火火出見尊は豊玉姫と結婚し、鸕鷀草葺不合尊を生み、さらにこの神が玉依姫を妃に迎えて神日本磐余彦尊らを生む。
3	①神武天皇紀		甲寅年に、塩土老翁の教えにしたがって都を定める場所として東方の美しい国の存在を教えられ、兄たちと日向を船出。苦難の末、辛酉年に橿原宮で即位。
4	②綏靖・③安寧・④懿徳・⑤孝昭・⑥孝安・⑦孝霊・⑧孝元・⑨開化天皇紀		帝紀的な記載のみで、個々の天皇の事蹟は記されない。
5	⑩崇神天皇紀	崇神天皇６年 崇神天皇７年 崇神天皇10年 崇神天皇12年	天皇、天照大神・倭大国魂神の神威を畏れ、天照大神を笠縫に移す（倭大国魂神については不明）。 大物主神を大田田根子に、倭大国魂神を長尾市に祭らせる。 四道将軍を派遣/武埴安彦の謀反。 戸籍を調査し、課役を科す。
6	⑪垂仁天皇紀	垂仁天皇25年	天照大神が伊勢に鎮座。
7	⑫景行・⑬成務天皇紀	成務天皇５年	諸国に命じ、国郡に造長を立て、県邑に稲置を設置。
8	⑭仲哀天皇紀	仲哀天皇８年 仲哀天皇９年	天皇、神託を信用せず、熊襲を討つも敗退。 天皇、突如崩御（一説に戦死）/皇后、新羅征討/凱旋して誉田別皇子を出産。
9	神功皇后紀	神功摂政元年 神功摂政46年（366） 神功摂政47年（367） 神功摂政49年（369）	麝坂王・忍熊王兄弟のクーデター。 百済、通交を需め、日本に使者を派遣。 百済・新羅が朝貢。 百済とともに新羅を攻め、任那七国を平定。

巻	天皇	年号	事件
10	⑮応神天皇紀	応神天皇２年（391） このころ 応神天皇16年	倭が百済・新羅を討って臣民とする（広開土王碑）。 技術者や学者の来朝が相次ぐ。 菟道稚郎子が王仁に典籍を習う。
11	⑯仁徳天皇紀	仁徳天皇２年 仁徳天皇４年 仁徳天皇11年 仁徳天皇13年 仁徳天皇30年 仁徳天皇87年	磐之媛立后。 百姓の課役を３年間免除する。 難波堀江を開鑿/茨田堤を築く。 茨田屯倉を立てる/和珥池・横野堤を築く。 天皇、皇后紀国遊行中に八田皇女を召し入れる。 住吉仲皇子が去来穂別尊を殺そうとして誅殺される。
12	⑰履中・⑱反正天皇紀	履中天皇元年 履中天皇４年 履中天皇６年	去来穂別尊、磐余稚桜宮で即位。 諸国に国史を置く。 蔵職を建て、蔵部を定める。
13	⑲允恭・⑳安康天皇紀	允恭天皇４年 允恭天皇８年 允恭天皇23年 允恭天皇24年 允恭天皇42年 安康天皇元年 安康天皇３年	甘橿丘で盟神探湯を行い、氏姓を定める。 皇后の妹の弟姫（衣通郎姫）を藤原宮に住まわせる。 木梨軽皇子を皇太子に立てる。 皇太子と同母妹の軽大娘皇女の姦通が発覚。 皇太子が穴穂皇子を襲おうとするが、皇子に包囲され自害。穴穂皇子即位。 天皇は根使主の讒言を信じ、大草香皇子を殺害。 大草香皇子の遺児眉輪王、天皇を殺害。大泊瀬皇子、八釣白彦皇子を殺害。葛城円大臣、眉輪王と坂合黒彦皇子を匿うも、３人は大泊瀬皇子に焼き殺される。大泊瀬皇子は市辺押磐皇子も殺害、御馬皇子は処刑。
14	㉑雄略天皇紀	雄略天皇９年（465） 雄略天皇19年（475） 雄略天皇20年（476） 雄略天皇22年（478） 雄略天皇23年（479）	紀小弓・蘇我韓子らを派遣して新羅を討つ。 百済の王都漢山城が高句麗により陥落、蓋鹵王殺害。 高句麗、百済を滅ぼす（直後に復興）。 武が「使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六国諸軍事安東大将軍倭王」に叙せられる/宋滅び、斉興る（宋書）。
15	㉒清寧・㉓顕宗・㉔仁賢天皇紀	清寧天皇２年（481） 顕宗天皇元年（485） 仁賢天皇元年（488） 仁賢天皇11年（498）	億計王（仁賢天皇）・弘計王（顕宗天皇）が発見される。 弘計王（顕宗天皇）即位。 億計王（仁賢天皇）即位。 武烈天皇即位。
16	㉕武烈天皇紀	武烈天皇８年（506）	天皇崩御。倭彦王を迎えるも、王は逃亡。
17	㉖継体天皇紀	継体天皇元年（507） 継体天皇６年（512） 継体天皇21年（527） 継体天皇26年（532）	三国から男大迹王が迎えられ、樟葉宮で即位。 百済に任那４県を割譲。 磐井の乱勃発。 金官国、新羅に降る。
18	㉗安閑・㉘宣化天皇紀	安閑天皇２年（535）	諸国に屯倉を設置。
19	㉙欽明天皇紀	欽明天皇２年（541） 欽明天皇13年（552） 欽明天皇16年（555） 欽明天皇23年（562） 欽明天皇31年（570）	百済聖明王に詔し、任那復興を命じる。 百済聖明王、釈迦仏の金銅像などを奉る（仏教伝来）。 白猪屯倉を設置。 新羅が大加羅国を滅ぼし、任那滅ぶ。 蘇我稲目歿す。

巻	天皇	年号	事件
20	㉚敏達天皇紀	敏達天皇12年（583）	百済にいた火葦北国造阿利斯登の子日羅を召還。
			蘇我馬子、石川の邸宅に仏殿を建立/物部守屋、仏像・
		敏達天皇14年（585）	仏殿を焼き、焼け残りの仏像を堀江に捨てる。
21	㉛用明・㉜崇峻天皇紀	用明天皇２年（587）	仏法への帰依を詔する/蘇我馬子、炊屋姫尊を奉じ、穴
			穂部皇子と宅部皇子を殺害。物部守屋も殺害。
		崇峻天皇５年（592）	蘇我馬子、東漢直駒に命じて天皇を殺害させる。
22	㉝推古天皇紀	推古天皇４年（596）	法興寺完成。
		推古天皇８年（600）	新羅と任那が戦う。新羅はいったん降伏するも、再び任
			那を侵す/隋に遣使を派遣。
		推古天皇10年（602）	来目皇子を新羅攻撃の将軍とし兵を授ける（翌年、皇子
			は筑紫で歿す）。
		推古天皇11年（603）	当麻皇子を新羅征討の将軍とする/冠位十二階施行。
		推古天皇12年（604）	皇太子、十七条憲法を作る。
		推古天皇15年（607）	小野妹子を隋に派遣（翌年、帰国）。
		推古天皇22年（614）	犬上御田鍬・薬師恵日らを隋に派遣（翌年、帰国）。蘇
			我馬子病臥（626年、歿す）。
		推古天皇31年（623）	医恵日、隋より帰朝。
		推古天皇36年（628）	推古天皇崩御/山背大兄皇子を推す境部摩理勢、田村皇
			子を推す蘇我蝦夷に殺害される。
23	㉞舒明天皇紀	舒明天皇元年（629）	田村皇子即位。
		舒明天皇２年（630）	第１次遣唐使（犬上三田耜・薬師恵日）派遣。
		舒明天皇３年（631）	百済王義慈、王子豊章を人質として奉る。
		舒明天皇12年（640）	南淵請安・高向玄理が帰国。
24	㉟皇極天皇紀	皇極天皇２年（643）	蘇我入鹿、山背大兄皇子を斑鳩宮に襲う。
		皇極天皇３年（644）	唐、第１次高句麗遠征。
		皇極天皇４年（645）	中大兄皇子ら蘇我入鹿を討つ。
		大化元年（646）	大化改新詔発布。
25	㊱孝徳天皇紀	白雉３年（652）	難波長柄豊碕宮完成。
26	㊲斉明天皇紀	斉明天皇４年（658）	有間皇子の変。
		斉明天皇６年（660）	百済滅亡。
		斉明天皇７年（661）	天皇、筑紫の朝倉宮で崩御。
27	㊳天智天皇紀（㊴弘文天皇）	天智天皇２年（663）	白村江の戦で大敗。
		天智天皇６年（667）	近江大津宮遷都。
		天智天皇７年（668）	即位/唐の攻撃により、高句麗滅ぶ。
		天智天皇10年（671）	近江令施行。
28	㊵天武天皇紀上	天武天皇元年（672）	壬申の乱勃発。
29	㊵天武天皇紀下	天武天皇４年（675）	竜田の風神祭と広瀬の大忌祭。
		天武天皇10年（681）	律令制定に着手/草壁皇子立太子/『日本書紀』編纂に着手。
		天武天皇13年（684）	八色の姓制定。
		天武天皇14年（685）	冠位制の制定。
30	㊶持統天皇紀	持統天皇３年（689）	飛鳥浄御原律令施行。
		持統天皇４年（690）	皇后即位/庚午年籍/藤原に行幸し、宮地を視察。
		持統天皇８年（694）	藤原京遷都。
		持統天皇11年（697）	軽皇子（文武天皇）に譲位。

※巻９の西暦は、百済記によって修正を施したものである。